

震災対処記録

(社) 御影敬和会
会長 水島恒夫

平成七年一月十七日午前五時四十六分、突然の激震に見舞れたのは一王山早朝登山の途中の事であった。咄嗟に傍の並木にとり付き一難を免がれ、急遽下山、帰途に見る倒壊家屋や亀裂の甚しい道路面などに災害の並々ならぬ事を知り慄然とする。ようやく全壊に近い自宅へ帰着。揺れの一段落したところで地域を一巡、視察する。自治会館(弓場会館)を始め多数の一般住宅の倒壊甚しく、又その為道路が閉塞され巡回も儘ならない状況の中、死者の出た事など聞き暗然とする。

見廻りを終え一旦帰宅、ラヂオで災害状況聞き、自宅を取片付け乍ら救援対策を探る。

そのうち罹災住民から「浜御影地域福祉センター」の開放依頼があり委員長として熟慮の後、非常の時でもあり独断乍ら仮住居として開放を許可することにする。

尚、其の後同センター入居者は漸次増加七十名を数へ七月末までその管理を続ける事となった。八月以降は憂慮していた長期残留者もなく正常な福祉センターとして復活出来る様になった。

さて震災の翌日(一月十八日)には御影浜の三菱石油のLPG漏洩のおそれによる国道二号線以北への避難命令が出され近くの住民と共に一斉に御影高校その他へ移動、当日は一泊する羽目になった。ガス洩れの危険は幸ひ事なきを得て翌朝は各自それぞれ帰宅出来た。然し其の後の日々は情報収集と住民の相談に対処してゆく多忙なものとなった。

地域巡回中、避難所へは入らず自宅で頑張る罹災者達が共同で暖を取り炊事等をしているのを知り、それに対し避難所同様の支援を区災害対策本部へ交渉、避難所扱ひにして貰

ふ事となり物資の支給も得られる様になった。又、右の共同炊飯活動については自治会理事及び会員有志に協力を依頼し、地域内の二ヶ所に設置、食生活及びふれあいの場を確保する事が出来た。又各方面からの援助物資の受取り役も自治会の理事に依頼、足労を願った。自炊の献立は受給の救援物資に合はせ、流動的に対応する事とした。そして、好評であったこの会は途切れ乍らも二月はじめまで続いたが追々に店舗なども再開し自宅での生活が可能となったのを機に解散し無事一応の役目を終了した。

次いで倒壊家屋への放火、汚物の投棄、又は盗難事故等々の不祥事を防ぐための巡回夜警を実施する事とした。取り敢へず理事及住民有志の協力で一月二十日より発足したが人手不足のため後には全住民が当番制でこれに当ることとなり継続することが出来た。この巡回夜警は一応の目的が達成された時点の三月末で打切ることにした。然し一部北地区では尚交通量が多く混雑していた為その後暫く続行していたがこれも四月三十日無事終了する事が出来た。

●住民からの申出としては

倒壊家屋の傾倒による被害への対処、震災による道路網変更のための地域道路の混乱の整理、仮設住宅入居の申込みに関する問合せ、転居先からの連絡方法、又煙草の吸殻及空缶の不法投棄、住宅内の視見、等々への対策の依頼があり、それぞれ対策本部の協力などを得乍ら解決して来た。然し中には解決不可能の申出もあり悩まされた事も多々あったが、後日思ひ返すと今回の様な混乱時に於ての行動としては皆よく協力しあい大した紛争もなく経過した事に感謝している。

其の他七十七才以上の高齢者の居処の確認、ひとり暮らし老人の安否の確認等は民生委員の協力を得て調査する事が出来た。

尚、当地区の被災死者は七名であった。

● 今後の問題としては

平成七年度は自治会費の徴収を免除し緊縮予算を徹底し、この一年は切り抜けることが出来たが会員数が三五七軒から二五二軒と約七〇%に減少した今後は事業計画の大巾な改革で経費の検討が必要で自治会活動も多少の制約を受けることになると思っている。又自治会館再建のための資金調達等々もあり問題は山積している。

私自信は震災後、過労の爲、病に倒れ、御影の地を離れる事となってしまひ自治会の再建に最後まで参画できないのは誠に残念であり申訳ないと思っている。

今後のことは次期会長に期待し及ばずながら後方から応援して行く心算りである。

震災後の救援、復旧活動について

御影本町五六会

理事 金本 清 一

1 震災後の救出活動

震災直後、不幸にも全半壊した家屋に閉じ込められ、自力脱出が出来なかった人達への初期救出作業は、すべて近隣自治会員の自発的且つ、献身的なる活躍によるものであった。救援にたずさわった人達も同じ被災者であったが、相協力し自身の危険をかえりみず被災者の救出活動を行ったことが多くの人命救助につながったことは特筆すべきことであった。

2 自治会館の開放とボランティア活動

震災により家を失った避難者の收容のため建物に損傷のなかった自治会館（五六会館）の使用をいち早く承認、更に他地区の自治会の人達にも開放し感謝された。

尚災害直後は遺体安置所にも活用された当五六会館に隣接する市営保育所と福祉会館も同じく避難所に転用され合わせて百五十人程の人達が最終七月初旬まで利用された。

上記の人達の生活維持のため自治会の青年会の有志が連日区役所から救援物資を引取り三会館の人達及び本町七、八丁目の被災者の人達に届けた。

又全国から来られたボランティアの方々からの物品の御支援と炊き出しのお手伝いも避難者の大きな支えになったと確信する。

3 復興に向けて

震災直後は町全体が瓦礫の山となり、これを片付けるだけでも気の遠くなるような年月がかかると思われたが市当局の迅速なる対応とボランティアの人達の御活躍に加え、自治会住民の復興へのたくましい意欲によって、新しい住居やマンションが続々と復活し以前より一層災害に強い町が創造されつつあることは喜ばしいことである。

当自治会の地車倉庫も倒壊したが、青年会員と自治会役員と数回にわたる合議により五六会館横に新倉庫を移すことになり、昨年末に耐火耐震力を備え機能面でも以前より優れた地車倉庫が完成し今年五月十一日と十二日のまつりには地区住民の復興へのはげみになるよう願って、地車を出動させることになった。

尚、昨年震災により中止となった御影地区の地車まつりに代えて御影連合青年会が中心となり古着を素材とした長さ十メートルの大縄を作成し、地元弓弦羽神社に奉納し、震災一周年の今年一月十七日に関係者が集まり厳かに神事を行ない地区の早期復興を祈って大縄を焼却する行事を行った。

以上。

八人の亡き骸

(社)西御影親和会

会長 藤澤 福男

1月17日は阪神・淡路大震災の記念日として後世に伝えられるだろうが、夜が明け始めた頃からの作業は筆舌に尽せない有様が続く。出入口の戸が開かないので手許にあった小道具で洗面所の小窓を破って外に出た。隣り近所の木造家屋は全部倒れている。近くを走っているJRの陸橋はどれも落ちて無残な姿となっている。これは大変なことになったと直感した。その頃救急車のサイレンが右往左往し始め、30分もしない内にその音は何重にも重なり合って耳に入ってきた。消防車も走り出した。火災が発生した模様だがそれはこの地域ではないと判断すると耳を貸す余裕はない。町内を見て廻ることにした。歩道に畳一枚を引っぱり出して座り込んでいる老婆、顔から血が流れている人。腕をかかえて痛そうにしている人。既に息を引きとったこの家の主人が毛布一枚で全壊した家の前に置き去りにされている。家族の方は連絡に走っているのだろう。様々な光景を見ながらも、それらの方々に声をかけることすら出来なかった。それは、この屋根の下に主人がいるんです、助けてください、と云う声があちこちから聞かれたからである。それぞれ近隣の方々が中心になって掘り出しをしておられる所へ、只、茫然としている人を見かけると応援に行くよう依頼した。然し、鋸やバールの様な道具がどこの家も取り出せない。困っている時に誰かが自動車修理のジャッキを持って来てくれた。このジャッキは私が知るだけでも5、6人は助けてくれたが既に息のない方もあった。この様な状況下にあって経験豊かな看護婦さんが一人随分活躍して頂いた。感謝に堪えない。午後になって警察官を見かける様になっ

たが手を貸してもらえない状態ではなかった。国道2号線は車が渋滞して動きがとれなくなってきた。遺体の安置場所を聞くため、電話が通じないので自転車を借りて区役所に行く。魚崎小学校だと判った頃は日が暮れていた。次は、遺体を運ぶ車の手配に手間どった。漸くのことで魚崎小学校に行くと、これ以上収容出来ないのので灘高等学校に運ぶ様連絡を受けたが、灘高の体育館も限度を越え、半壊となっている御影大手会館に運び込まれる様になり、いつの間にか次々数が増えて行く。この遺体が誰なのかも判らないまま道端に転がっていた茶碗に土を入れて線香を手向け、8人の亡き骸と共に真っ暗な部屋で寒さに堪えながら夜を明かす運命となった。

ちなみに、西御影地区は、630世帯の会員中26名の犠牲者を出し、家屋の全・半壊は60%に達した。

一方、地震当日の夕方から、自治会役員が中心となって、隣地の県立御影高校の校庭にテントを張り、西御影親和会の拠点を作り炊き出しを始めた。このお陰で本格的な給食が開始されるまで住民の多くが飢えを凌ぐことが出来たのである。

●七万人の避難騒ぎ

地震の翌朝6時過ぎ、まだ薄暗い中を浜の方から避難している老若男女が、多少の荷物を持って集団で県立御影高校の校庭に入っこられた。聞くところによると御影浜にあるLPGタンクからガスが漏れたので国道2号線から北方に避難せよとのことである。

避難者は増々多くなり運動場や建物内は人で完全に一杯になった。この騒ぎは七万人に及び、家屋の下敷きになっている人の掘り出しを途中で放って避難した地区など家庭の中で問題が起ったという話も聞いている。

このことについては、東灘自治会連絡協議会とエム・シー・ターミナル株式会社と話し合い、施設の抜本的な耐震対策と地域住民の生命の安全を守ることの協定を行った。

震災の教訓

郡家地区自治会

会長 柏木康男

ドーンと轟音、メリメリと木の裂ける音、引き続いてガタガタのひどい揺れと同調して割れる硝子の音。

住み馴れた我が家との訣別を布団を頭からかぶり、海老の様に腰を曲げて揺れの止るのを待つ迄もなく判断する事が出来た。幸い二階で寝ていて女房の無事も確認、足元をかためガスの元栓を閉じ、火事の心配のない事も水が出ない事も確認し、近所の被害状態を把握すべく虫が知らせたのか前日購入したゴム長靴にはき替え、手袋とタオルを腰にぶらさげて外出した。最初に玄関先の貯水槽の蓋が飛び出していたので元に戻し、北へと走り山手幹線まで出ると中勝寺がない。水神宮の大きな石は横に寝ていた。北隣の家は全壊。大声で5～6回名前を呼んだが物音一つ返ってこなかった(数日後遺体で発掘された)。追っかける様に小路を挟んで2軒目の女性が助けを求めているとの事で現場へと急ぐ(道中2～3人の家族が下敷きになっているから助けてあげての声もあったが)。既に近所の人数人がどうして良いかと思案に暮れていた。110番に連絡がつかなければ深田池の消防署に走れと、倒壊を免れた近所の人とその役を引き受けてくれた。最初の素人が手を下して二次災害を引き起こしてはとの非積極的意見が、誰が言うともなく我々の手で救出せねばとの積極的行動に変るまで時間を要しなかった。救出用具として三丁のシャベル、鋸二丁とペンチも持ち寄られた。全壊家屋は震災を免れた瓦葺二階建の重々しい住宅、早く助けての声は段々とか細く感じてくる。声を頼りに救出口も即決、十名程に増えた人が夫々の特技を生かし自分の出来る作業を黙々としてやっ

た、傍観者は一人もいなかった。貧弱な救出用具は急ぐ心とは裏腹に大変な苦痛と時間を浪費した。一本の柱を切断するのに家庭用の鋸では息は切れても柱を切るには大変な作業であった。木が鋸をかむ、上下左右と切口を替え、人を替えて一本の柱に30分も費やしたのではないか。友人が中型のジャッキを持って来てから作業は進んだ。悪闘する事3時間午前9時頃黒ずんだ指先が見え、なんとか自力で脱出可能との本人の言葉で作業に拍車がかゝつて来た。私は病院探しに走った。先づ西へ、横目で焼失中の家を見つゝ、病院に着いたが門扉は開かず人影もない。諦めて東へ。途中でパトカーに出会い甲南病院へ行けと指示され現場に立戻る。毛布を敷いたワゴン車が用意されていた。程なく救出。甲南病院へといそいだ。9時30分頃と思う。病院は車と負傷者でごった返していたが、スムーズに治療室に運び終え看護婦に後事を託す。病院の医師、看護婦が一体となり、テキパキとした処置活動に感服、徒歩にて帰途についたが、途中阪急沿線以北は予想外に被害が軽微であった事も判った。倒壊は免れたがあわれな姿の我が家にたどり着いたのは10時半頃と思う。

当時、私は郡家自治会の相談役で実質的な活動はしていなかった。郡家地区には自治会館もなく、安藤前会長は自治会活動運営には独自の会館が不可欠と確信され、その必要性を事ある毎に力説し努力され、年会費より50万円の積立もしていた。被災後、住吉仮設住宅に移られた後、心労の為5月に発病された上、9月、夫人に先立たれた後を追う如く、11月不帰の人となられた。前会長の予言通り会館のない郡家地区では群華幼稚園で園の関係者等を自然発生的に最高120名の避難者を預ったとの話を聞いたが、自治会としては被災者の避難に役立つ事は皆無であった。然し自治会役員、特に青年部員が、救援物資の調達配布や広報等に献身的な協力活動をし自治会の存在価値をアピールしてくれた功績には

自ずと頭が下がった。

会館が無い為、いざという大切な時、どれだけ地区住民の役に立つ事が出来たか。震災前の役員等の真向な努力にも拘らず存在価値を訴える事は出来なかったのではないか？

6月の或る日、自治会の存続につき柳田副会長宅で幹部役員が集まり会議した。今後の活動、会費の徴収、会館をどうするか、難題ばかりで妙案も無く、取り敢えず年末警戒等手近な事から活動を始める事、会館の年内再建を決め、夏原房次郎、芳郎両部長が中心となり計画の実行にとりかゝり12月26日完成、年末警戒の間に合わす事が出来た。私は震災時自治会には殆ど関与していなかったので、手記を書く資格は無いが、災害を通して感じた事を列挙すれば ①戦災の体験が非常に役立った。②大災害に文明の利器は役立たない。③避難場所・救急病院の報知伝達。④近所付合いの重要性とプライバシーに名を借りた疎遠の反省。⑤初期活動の効用＝住民の助け合い協力の力の偉大さ。⑥避難設備と災害対策器具を具備した自治会館の設置＝建物の補助より土地の斡旋がなければ問題は解決しない。⑦各自治会の育成充実に市側の積極的取り組み。⑧縦割り行政の見直し。⑨地区の環境に合致した都市再建計画＝郡家地区では無用の公園より⑥の会館。⑨自然の利用特に小川の存続と流水の利用＝災害時住吉川の分水が使用水として利便、飲料水を節減できた。防火用水としての利用も可。等々。 以上

大震災の回想抄録

御影山手自治会

会長 森田周一郎

思い起せば、あまりにも残酷な阪神大震災が突発した前夜のことである。会員世帯總数1,657戸を数えるマンモス単位自治会の地域住民として、その住環境の悪化に対処するための住民集会在、平成7年1月16日午後7時から、60余名の参加者のもとに御影山手自治会館で開催された。

昨年来、灘区土山町に所在する元神戸大の跡地利用計画が樹立され、17,000㎡の跡地のうち、その大半が民間の不動産業者に譲渡され、やがて13階建の高層マンションが建設されるや、百世帯あまりが入居する計画が呈示された。

この構想は、隣接の当自治会地域に有形無形の多大な悪影響を及ぼすことは必定であります。よって当自治会はその対策を検討する必要に迫られ、かねて自治会が策定していた提案を、当夜の住民集会上に提起説明し、満場一致で異議なく可決された。

小役ほか役員一同が、その成果を期待しつつ散会したのは、午後9時10分であった。

その翌朝の平成7年1月17日未明、突如として勃発した大地震の恐怖は、到底筆舌に表し難い。

十秒前後も続いた物凄い大揺れに、寝床で布団をかぶって耐え抜いていた時は、「これは大変なことになった」と慄然自失の態であった。

老妻の無事を確認のうえ、ともかく着替えをして屋外に飛び出し、周辺を見渡したところ、格別変った情景は見当らなかった。然し屋内は停電し、ガス水道は使用不能であった。家具が倒れ、陶器類は破損し、壁の損傷が目立ち、庭の燈籠は倒れていた。

正確な記憶は薄れたが、辛うじてラジオ放送を通じて阪神淡路の広範囲にわたって惨害が発生していることを知り、まさしく暗然たらざるを得なかった。さらに案外早く復旧したテレビ放映により、市内中心部の惨状を知るにつけ、事態の深刻さに驚愕仰天せざるを得なかった。

おかげで当自治会対象地域（御影山手二丁目～六丁目）の被害は、他の地域に比較すれば總じて僅少であったと思われるが、やはり日常生活の不自由さは日が経つに従って深刻になっていった。

幸いにして、区役所の防災対策本部をはじめ各出先機関の好意により、連日被災住民に対して、弁当・パンほか食料品を主体とする救援物資が配給された。これ等は、各家庭における毎日の食生活に、どんなに役立ったか図り知れない。また何処の篤志団体から恵与されたのか判らないままに、多種多様の缶詰菓子、インスタント食品、加工飲料等が自治会館へ持ち込まれた。そして品種や数量の都合で、その配分方法に苦慮することもあった。

連日500名から600名に及ぶ地域住民が、救援物資配給の恩恵に浴した次第ですが、毎日所定の時間帯に、この配給作業を企画実践することは案外気苦労であった。

自治会役員は申すに及ばず、婦人会や一般住民有志の自主的な奉仕によって、長蛇の列をつくって立ち並ぶ老若男女の一人一人に、整然と救援品が交付される情景を目撃するとき、折りにふれて目がしらがうるむこともあった。

当自治会の対象地域は、阪急御影駅西方200m地点の神戸線から六甲の山裾に至る南北1km、東西400mのゆるい斜面地帯に開けた緑の多い、閑静な、区画の整然とした純然たる住宅地であります。

自治会区域内には、小型スーパーが1店あるだけで、五丁目の一角に4軒の雑店舗が開店しているに過ぎません。

三月初旬におけるガス・水道の復旧から凡そ1ヶ月遅れて、阪急六甲經由JR六甲道ゆきの小型市営バスが開通したのは4月10日であった。神戸の中心部へ出かけるのに大変便利になって、一挙に町並が明るくなった感があった。

丁度その前後の頃、不愉快な難題としてその対策に苦慮していたのは、山手大通り交差点に直面したゴミステーションにおける荒ゴミ処理問題であった。

震災被害の一環として、各世帯に発生した大量の粗大ゴミが、連日集中的に交差点脇のステーションへ投棄せられ、地元近辺以外の遠方からも、夜陰に紛れてトラックで運搬してくる状態で、延々20メートルに亘って歩道を占拠する状況であった。その間、一再ならず敢行された環境局の特別除去作業が終了した直後から、一夜一日のうちに粗大ゴミが山積する毎日であった。

普通ゴミも、曜日時間の区別なく自家用車で運搬してくる乱脈ぶりで、再々の自治会名の警告要望も全く無視され、何の効力もない状態であった。よって環境局にその対応策を要請し、事態の改善を求めた結果、程なく不法投棄処罰を公示した大型警告板が設置されました。警察署、環境局事業所、土木事務所連名の公示は極めて有効に作用し、急速に不法投棄が減少しました。お蔭で昨夏いらい現今に至るまで全く平常に戻っています。

現在御影全域には、13区分の単位自治会が存在していますが、今回の大地震の犠牲になられた物故者が一名も無かったのは、正に当自治会のみであります。他の自治会区域における多数の故人に対し、謹んで御冥福を祈る次第であります。

また当自治会以外の地域においては、多種多様の建造物が多数損壊していますが、面積人口とも最大の当地域の被害状況は、比較的軽少のように思われます。平成8年3月末現在における被害家屋の復興状況を簡記します

と、建替完了26戸、建替工事中19戸、建替予定26戸、計74戸で、全世帯数に対する比率は、0.45%程度と推定されます。無論、どの世帯とも家屋の修理修復に不測の出費を要したことは申すまでもありません。

幸いにして当地域（御影山手二丁目～御影山手六丁目）は、比較的被害が少なかった実態を踏まえ、当自治会において例年どおり自治会費（月額200円）の負担を求めました。

従って自治会活動の一環として、保健衛生行政への協力、ラジオ体操の会開設、敬老行事の施行、懇親見学バス旅行（バス4台）実施、生花手編教室開講、共同募金応募、弔慰会葬、会員名簿作成（3年ぶり）等例年どおり施行実践できたことは望外の仕合せであった。

ここに拙稿を閉じるにあたり、大震災突発いらい当今にいたるまで、多事多端な市区行政の一翼を担当し、連日辛苦に満ちた激務に従事せられた公務職員各位の御苦勞に対し、心から深甚なる敬意と感謝の意を表する次第であります。 完

震災活動体験

御影山手自治会

会長 西川 一行

御影山手自治会は御影山手二丁目から六丁目にいたる区域を対象とし約1650世帯で構成されております。阪急神戸線の山側に位置しているため地震波の影響が比較的少なかったと思われませんが、宮谷川沿いと石屋川沿いで、また場所によりますが48戸の共同住宅一棟と一般家屋数10軒が全半壊の被害をうけました。ただ、当日死者が皆無であつたことは何よりのさいわいでありました。

地震当日の夕刻には電気が通じましたのでほつとしましたが、水は2月中旬まで、ガスは3月中旬まで中断しました。これらのライフライン復旧がどうなるかは住民が最も知りたいことでしたが、自治会として情報を集める手段が不備であり、行政からの連絡待ちという姿勢しかとれなかつたことは大いなる反省点であります。

当時、御影山手自治会館は御影北小学校と同様の避難所として登録されましたので、1月22日午後から救援物資の配給が始まりました。当時、自治会長は森田周一郎氏で私は副会長でしたが、食料保管上暖房を使えない部屋での作業でありますので、私が物資分配の責任者となり3乃至4名の理事とともにまた婦人会およびボランティアの主婦の応援も得て物資の分配に当りました。

御影山手地区の大半は家屋の被害少なく寝泊りできるので、宿泊者の居ない避難所でしたが、水・ガスが中断して調理できないため毎日500名乃至700名の行列ができました。小雪の降るような日は行列の人達も寒かつたと思いますが、その寒さがないと食料品がもたなかつたと思います。避難所は宿泊者が暮らしているものとして色々な物資が配給されま

したので、分配できない物資は御影北小学校の方に廻しました。

2月中旬に水道が復旧し食料品も買えるようになってきましたので、区役所の救援対策本部に連絡して2月17日まで配給を受け、それ以後は辞退することにいたしました。

私にとり大変貴重な体験をさせていただきましたが、倒壊家屋から死傷者を救出するという戦時中を思い起すようなことのない御影山手地区でありました。しかしながら長雨による土石流などの災害については安心できない地区であり、今後も注意が必要と考えております。

以上

平成八年六月二十七日

震災手記

西地区協議会

竹谷輝夫

●地震その瞬間

平成7年1月17日、午前5時46分、起床しようと思った瞬間、ものすごい地鳴りと共に窓ガラスがねじれるような感じのものすごい振動、私はあわてて布団にもぐり込んだ。この一瞬、この世の終わりだと覚悟しました。一呼吸おいて今度は今まで経験したことのない大きな横揺れ、建物がどっちへ倒れるかなと無意識のうちに身構えておりました。忘れるに忘れられない十数秒でした。

●地震直後

家族の安否を確認して表へ飛び出してビックリ、近所の家が道路に飛び出し、コープ神戸本社の5階建ての鉄筋の建物がひっくり返っている。西地区会館の建物も傾いている、中には入れない。

その会館の前に次々と集まって来る人々、寝巻のままで飛び出して来る人々、その頭から血が噴き出している。慌てて救急箱とタオルを探し手当てをしかけたら「誰それさんが家の下敷きになっている」「誰それさんの家族も…」と助けを求めて人々がやってくる。

●救出作業

会館には区長をはじめ役員、青年団員も集まってきた。これらの人を中心に近所の人たちを集め7～8人で一つの班を編成し（人手はもっとほしかったがこれで精一杯）それぞれ持ち場を決めて救出にあたる。ガレキを除けながら家が崩れないように柱を切る。その間に何度か余震に襲われる。その度に救出作業がひるむ。

携帯ラジオからは、「阪神地域で震度5程度の地震があった模様」とのんびりとした報道、聞いていて腹が立って来る。風の便りに

既に、「JRの六甲道駅が落ちた」「阪神電車が高架から落ちた」「阪神高速の高架が倒れた」との情報が人づたいに入ってきているというのに……。

最初におばあさんを助けだした。つぎに青年を（この青年は腕を骨折）そして二階が一階になった文化住宅の下からは、あっちからもこっちからも「助けて」の声が聞こえて来る。まず女学生を助けだす。その女学生は「まだ母と妹が埋まっている」と言う。妹と思える女の子の足が見える。声をかけても返事がない。奥の方から母親の声がする。その手前で男の人が呻いている。先ずはその男の人を助けだした。大きな怪我はしていない様子。

再び妹に声をかけるが返事がない。足の裏を見ると紫色になってきている。それを見て誰からともなく母親から助けようと言うことになり母親の救出にあたった。しかしどこからももぐり込めない。やむを得ず二階の居住者の了解を得て、家具をのけ、二階の畳と床を破り、穴を開け助けだす。

丁度その時（時間にして午前10時30分頃）道路を隔てた向いの倒れた文化住宅の1階奥の方から煙が出はじめた。「消火器……、消火器」の声に54本（あとから数えた）の家庭用消火器が集められたが、ガレキに妨げられて消すことができない。とうとう燃え上がり、その文化住宅の一角約500坪ほどが全焼した。燃え盛る炎を向かいに見ながら再び救出作業が始まる。

やっとの思いで母親を救出した。あと残るは妹一人、人一人がやっとな腹ばいで入れるすき間からもぐり込んだところ、二階の梁（鉄柱）と地面でその子の顔面が抑えつけられていた。圧死である。地面を木ぎれで掘りながらすき間を作り引きずりだし病院へ運んだ。

その子を含め西地区で亡くなられた方々は5名。

●被災者避難場所の設置

西地区会館東隣にある阿弥陀寺のご住職のご好意により本堂並びに同寺会館を開放していただき、被災者のために避難場所を設けた。近所の人々から御影地域の人まで約250名が避難した（3月上旬まで続く）。

●炊き出し始める

その日も2時過頃、阿弥陀寺に避難された人々への炊き出しをするため、神戸市内唯一の清流住吉川で米を洗い、タオルで漉した水でお粥をつくったが、250名にも及ぶ被災者には、幼児のお茶碗に一杯程度しか分配できず、それでも不足しがちになるため、どんどん水を足していく。おかげで私たちが食べる時は、米粒がほとんどなくおもゆの状態でした。しかし温かい食事をしてもらえたことは、被災を受けられた方々から感謝された。

阿弥陀寺が正規の避難場所でなかったため、弁当の配給がなく、震災3日目の朝までお粥のみの食事が続く。

●西地区被災者連絡本部設置

阿弥陀寺避難者のために、当区協議員、青年団、婦人会、被災者有志により被災者連絡本部を設置し被災者の世話にあたる。

飲料水の確保、男子用簡易トイレの設置（阿弥陀寺トイレの清掃）、被災者名簿の作成、夜警、封鎖された道路のチェック等々、また、区役所へは飲料水や弁当の配給の折衝、仮設トイレの設置の要望、区役所からの連絡事項の伝達等々の仕事を手分けして遂行した。全員が結集しこの難局を乗り越えていったことは、近隣の人々との間に太い絆ができたことと思う。

蓬萊地区震災対策本部活動の一年間

蓬萊自治会

会長兼震災
対策本部長

浜 部 一 三

1996年1月20日

震災後一年経過した現在、住民の皆様方のご賛同によりいち早く発足した本地区震災対策本部の活動、行政側の対策実施とそれに対する住民側の対応等について過去一年間の主な軌跡を追ってみたい。

地震直後は的確な情報が全く無く行政側からも何らの指示、勧告等が皆無であった。住民の方からも避難場所等について何らかの指示を求める声があったが、あのような過去に未経験の激震時には常識的な避難場所、例えば学校の講堂や体育館等は空間に柱がなく開口度大きい為大余震がおそってくる場合を考えると過去の例からもかえって危険かも知れず、自治会長として迂闊な指示は出せなかった。大きな余震が若干おさまった三日後の一月二十日に地震後初めて呼び出しがあって東灘区の各自治会代表が集まり連絡網、緊急援護物資や給水などの供給方法、粗ごみ処理、老人の介護、自警等について話合われた。

当自治会はこれらを受けて直ちに救援物資の受入れ体制を整え、会員の安否や避難先についても電話や文書により問い合わせを実施した。

しかし地震による土地、家屋にもたらした影響や被害、そしてその対策については議論をするのに未だ余りにも情報不足であった。ただ住民の皆さん方の積極的なご意見が一致して本地区ではいち早く自警団が編成され、毎夜寒中に各地区毎に巡回自警に当たられ非常時の夜間の安全が保たれたことは事故を未然に防ぎ、皆さんに安心感を与える上で極めて効果が大きかったと感じている。

その後委員の献身的な調査により当地区内

の被害状況が明らかになり、その対策実施はとて個人力や裁量のみで解決出来るものではなく、また複数の方々の共通問題も多くこの際、地区の震災対策本部を設置して意見や要望を問題と共に整理し、共通問題については県や市の行政機関に一致して折衝に当たることとなった。以下に当対策本部が取り上げ、行政側や住吉学園等と折衝した問題や実施した対策、その他協議会などのイベント等の主なものを項目毎に列記する。

*「地滑りの可能性調査」 2月6日、蓬萊地区全域を野田、橋本氏等土木の専門家と共に調査の結果、場所によってはその後の余震や雨期における大量の降雨により地滑りの生ずる可能性なしとしない見解が出た。2月8日、早速神戸市東部土木事務所へ出向き、早急に調査実施に踏み切ってもらよう要請。その間に各道路に生じているクラックを我々住民の手で補修したいとして充填用レミファルトを支給して頂いた。

*「第一回蓬萊自治会総会にて同地区『震災対策会』が正式に発足した」 2月18日、この会合内容については神戸市議員T氏より詳細神戸市へ伝えられた。

*「東部土木事務所（以下東土所）による地滑り調査実施開始」 2月22日。

*「神戸市役所土木局長に震災復興対策実施につき直接請願」 3月24日、T市議員の斡旋により神戸市土木局長に直接被害の実態を説明し、市側の早急の対応をお願いする事が出来た。

*「(東土所)による地滑りの有無に対する計測結果の報告と見解、説明」 3月25日、日の神教団本部の会議室で(東土所)副所長の説明あり、きっぱりと今後の広域地滑りの可能性を計測に基づく研究結果より否定された。問題の7地区における赤塚山高校グラウンド側道路の湾曲部については更にボーリング調査等で詳細に追跡調査を続け対策案を決定するとのことであった。この説明会が転機と

なって住民の皆さん方も現土地での復旧や再建を考え始められた方が多くなったと思う。

*「建設省の決定で個人所有の宅地の傾斜地にある擁壁補修を兵庫県が実施し、国が半額を補助する方針を決めた」 3月25日の新聞発表。これは『災害関連緊急傾斜地崩壊対策事業』と呼ばれる今年度限りの時限立法で、擁壁が3メートル以上あり、放置すれば5戸以上の住宅や道路、排水路、ガス、水道などの施設に被害を及ぼす恐れがあるとの条件つきであった。蓬萊地区での対象箇所は前記のように早くから行政側に申請していたため地区内5箇所の候補地につき検討が始められていたが、最終的には周知のように4ヶ所が対象箇所に決定された。

本プロジェクトについての県側との打合せや折衝は5月初めより年末まで続きその間にボーリングなど事前工事がすすめられている。対象になった四地区のプロジェクトは夫々代表委員や住民の方々のお骨折りにより順調に進行している模様。

*「5地区ならびに3地区内の私道応急措置申請」 5月～7月

住吉学園の協力を得て神戸市の(東土所)へ関係住民による協議印をそろえて、申請し施工を決定していただいた。本工事は10月初めには完成された。

*「3地区側溝の復旧工事」 地区のあちこちで側溝の損壊が見られたが、特に1地区西側道路を隔てた3地区内にある住吉学園所有緑地の西側よりローズハイツの北より東側を通りバス道の側溝に合流する間の損壊が激しかった。早くから住吉学園には補修方申請していたが、同学園の厚意で緑地に沿う分は学園が実施し下流の民地に沿う側溝部分については同学園より工事費の半額助成がなされた様であった。現在では復旧完成した三矢氏宅北側私道の側溝につながれて全体の水流が明確になった。

*「10月8日の震災対策委員会」 県の傾斜地対策事業や市の道路整備工事の進捗度の確認を行った後、更なる方への要望事項をまとめ10月11日、(東土所)へ詳細申請資料を最終的に提出した。

震災後約一年を経た今、220所帯以上を有する当地区では4箇所の擁壁群を県のプロジェクトにより再建中、2箇所の私道を神戸市の手で造成完了、7地区の市道の一部不安定箇所のパイル打ち強化工事を実施中である。この他地区内の道路、階段、側溝などの損壊箇所も遅ればせながら(東土所)の手により逐次復旧されつつある。また、地区内約40軒以上の住宅やマンションが完全に取り壊されたが、その内約15軒以上の邸宅が新築完成または建築中であり当地区もようやく再建の兆しが見え始めているこの頃である。

『蓬萊地区震災対策本部』は当地区住民の皆さんの総意で設立されたが、過去一年間役員の方々の並々ならぬご尽力と住民ご一同のご理解、ご協力のおかげにより上記の様な現況になっており正解であったと考えている。

思うこと

渦森台3・4丁目自治会

会長 酒井 克己

過ぎ去った今、振り返っての感懐の1、2を述べさせていただきたい。

その時わたしは床の中で揺れを感じた。しかしこの位で家は倒れないとの思いもあったが地域のみなさんの様子が気がかりになり、身づくろいをして手にマイクと懐中電灯を持って表に出た。

その第一声「自治会の酒井です。みなさんおけがはございませんか」と叫んでみた。すぐ前の家の2階の窓が開いて「ありがとう、大丈夫です。」と返事が返ってきた。「けっこうけっこう。」と自分を励まし一軒々に声をかけるようにして歩いた。あるお宅では家族全員が玄関まで出てきてお答えくださった。

マイクを右に左に回しながら、道路の交叉点では立ち止って3度4度声が届く様にと叫んだ。最後のお宅まで回り終ったら、夜も明けていた。

地域内のみなさんがお変りないことを知り眼下には神戸の街々のあちらこちらに火の手が上っていた。消防車の警笛が絶え間なく流れていた。先づは安心との心のゆるみから、しばしまどろんだ。目醒めてわが家はどうかろうと炊事場をのぞいたら思った通り、派手に食器が飛び出していた。2階の息子たち4人はどうかろうと上ってみたら食器戸棚が倒れていたが元気だった。

後で笑ったことであるがわたしの行動の第一は頭の上方向の窓ガラスが壊れて顔や頭のけがをしては大変と思い両手を伸ばしてガラスを押えた。しかし押えたのはガラスでなくベッドのわく板であった。よく昔から火事場の馬鹿力といわれる様なとんでもないことだった。

その時私は自治会長

鴨子ヶ原3丁目地区自治会

会長 畑尾卓朗

それから既に1年が経過している。10年間お世話になった自治会長を止めてからも1年が過ぎているが今でも時々お出合いする地域の方から「あの時にお世話になった」「心細く思っていた時だったので掛けられたことばがうれしかった」といわれ恐縮している。

その上今も多く残っている更地を見るにつけ思い出すのは昭和20年の神戸大空襲である。お見舞いのため三宮から和田岬まで歩いたがその光景がこの度の地震後の様子とあまりにも似ていることだった。短かい一人の一生の中で二度までめぐり遭うことの不思議を深々感じた。

自然と人間は共に生かされ生きていくことの大切さがいわれているが今回の地震は自然からの貴い人間への戒めだったのかと思ひ深めている。

今もなお音におびえる子どもたちがいると聞く。それは子どもたちだけでなく、70才を過ぎたわたし自身もそうである。

直接大きな被害に遭われた方々の心の痛みはまだまだ五年も十年も長い年月続くものと思われる。

ご同情申しあげ、わが街にあたたかいぬくもりが一日も早く訪れることを望みたい。ご依頼を受けた震災手記の原稿としてはいささか心もとないものと思われるが以上でもって終らせていただきたい。

以上

当鴨子ヶ原3丁目自治会は1年交替で会長以下役員が改選される組織になっており、順番で平成6年度の会長に私が選出された。

平成6年も無事に明け、そろそろ次年度の役員改選に向け準備もしなければならぬと思っていた矢先1月17日を迎えてしまった。幸い自宅は、家財以外は大きな被害が無かったのでこの自治会の事を考える余裕が出て来たのが本音である。被害状況を見て廻ったが、3丁目北西部のアパート数棟が壊滅状態で一人死亡された。私が経営する幼稚園々児も数名いたが、幸い無事で渦が森小学校へ避難された。また外見は壊れた様に見えないのに、このまゝでは住めないと云う戸建住宅も10数戸ある事が判った。火災が一件も発生しなかったのが幸いであった。渦が森小学校へ救援物資を取りに来る様にとの連絡を受け駆け付けたが自治会単位で、トマト1箱30ヶ、パン、おにぎり等10数個で約450世帯にどうして分けるのか、と辞退した。当時食糧、水等不足しているのは一般家庭でも同じなので、災害対策本部に問合せたら、自治会として受入れ場所があるなら救援物資を支給するとの返答だったので幼稚園を受入場所として使用する事にした。自治会役員を非常招集し、物資の配分方法、受取時の人員配備等討議した。

物資も各世帯に1個ずつ行き渡らない品物も多く、その配分には若干苦勞したが、当自治会ではもめる事もなくスムーズに行われた。

数回の救援を受けたが、2月になって食糧等の購入が可能となって来たので、また幼稚園を再開する必要があり救援物資は避難所優先にすべきと考えその受領を打切った。

3月は役員改選時期になっているが、この

様な状態で会長を退任する事もできず5月に改選を延ばす事にした。

役員の方々もその事を了承して頂いた。

震災追憶記

魚崎南住宅1号棟自治会

会長 辻 忠 治

平成7年1月17日午前5時46分阪神淡路大震災追憶記を書くにあたり項目別にして順次述べさせて戴きます。

(一) 当住宅の所在地と環境

当住宅は酒蔵の町魚崎郷の東部に位置し西部に住吉川が流れ阪神電鉄と阪神高速、国道43号線に狭まれた位置で11階151世帯、住居人370名、昭和47年に入居しました。

近辺には川鉄、神鋼のマンションがあって住宅街とでも言った処です。難点を申し上げれば阪神電車と国道を走る自動車の騒音の谷間にあつて窓を開ける事は出来ません。又自動車の排気ガスの公害もあると思います。交通の便が良いのが何よりです。住環境は良い処ではないでしょうか。

(二) 震災による住民の被害状況

市の査定では半壊です。大音響と共に揺れに揺れた十秒間で鉄筋コンクリート造りの住宅は大いなる被害を受け自然の力の偉大さをまざまざと見せつけられました。住宅はL字型に建てられていて東西に長く南北に短い状態、地震は淡路が震源地の爲に東側のL字の継ぎ目に当る処が被害を受け壁は落ち上部では20糎位の開きが出来見るからにもう駄目でないかと思はせる位でした。又下部では集会所が丁度L型の処に位置していたので床板はくぼんでおるし壁は大きな亀裂が数箇所入り内外壁共に脱落がひどく出来ていました。

建家内部にいたっては2階3階の玄関ドアの不都合があり窓枠のはずれた個所、L字型通路の部分の切断がありました。2台のエレベータの内1台が落下損傷して使用不可能となりました。

建家の外部では排水管の破壊あり又給水ポ

ンプ室のかたむき、テレビアンテナの破損、屋上給水タンク配管の破損等がありました。

(三) 震災当日の住民の行動

結論から見れば死者なく、火災なく、軽傷程度で「不幸中の幸」無事で何よりでした。

住民の皆様が前代未聞の大震災で右往左往し、それに追い打ちするように御影浜のガスタンクの棄裂による「ガス洩れ」が発生して住民は山手方面に避難すべしの勧告をうけ一度は避難所に入ったものが又荷物背負い山の手へ歩きました。然し数時間後に勧告がとかれ元の避難所へきた。その時は満員で入れず又避難所探しをする有様でした。此のガス洩れ騒ぎの一件で住民の居所がばらばらとなり自治会としては伝達事項を知らず手がかりがなくなりました。

(四) 自治会の震災対策

私は当日ではガス、水道、電気、電話が使えないので手の打ち様がない為ラジオの情報で市中の様子を聞き魚崎の街の様子を見て廻りました。魚崎地区の被害のひどさに驚く許りでした。当日は保育所で着たままごろ寝、次の夜は住宅の集会所で仮眠、数日後に一階一号の空室を自治会と住民の連絡所として利用、住民の消息の把握につとめました。住民の3割の人の消息は不明でした。それから市では当住宅は修復して残す方針であることを得まして皆んなに家に帰る様言いましたがライフラインのない家に帰ろうとしません。2月に入って電気電話の開通、排水管の仮復旧、仮設トイレ設置とこぎつけエレベータ1台が修理運転、テレビアンテナの取替、自衛隊給水自動車の手配、仮設給水タンクの設置となりぼつりぼつりと住民も帰り始めました。3月になってから給水管工事が復旧、3月4日水通しテスト完了、3月5日から念願の水が出るようになりました。

排水も可能となり仮設トイレ撤去、残るガスですが3月25日ガス工事完了、ライフライン可能となり、避難先から引き上げてくる

人も日増しに多くなったので今後の復旧工事に関しては工事関係に詳しい島田副会長を中心とした「震災復旧工事委員会」を設置し工事完了までの市及び業者との折衝又は工事の見張り役をすべく取り計り現在に致っております。

(五) 震災の様な緊急事態の住民の心構え

先づ日頃から緊急避難所を確認しておくこと。家を何日も留守にする時は隣近所に連絡を取って出かける。若し隣近所が都合が悪い時は、自治会長に告げて出かける事。火災予防には充分注意払って出かける。緊急事態では常に流言飛語がつきものですのでこれに惑わされないこと、一人暮らしの老人に対しては皆様注意を振ってあげましょう。

(六) 市住宅局への御願い

今回の震災に鑑みるに大世帯を抱える住宅に於ては、住宅の敷地内で住民の半数位が非常時に避難可能な集会所を設けていただきたい。勿論住宅とは別棟とし、普段は地域活動の場として活用しては如何でしょう。

最近住宅には子供が少いようですので広い子どもの遊び場のある処は有効な土地利用と思います、如何なものでしょう。

以上。

震災直後の住民活動

魚崎北町5丁目自治会

会長 江部 稔

1月17日早朝5時46分考えもしなかった大地震があり、夢の中から跳び起き、まず家族の安否を確認し、ベランダに出ると今まであった家がない！一瞬自分の目を疑った。すると前方で“助けてくれ”の声、すぐ下におり生理めになっている老夫婦を助け出そうとしたが手に負えず近所の自治会の元気な人を集め救出作業に取りかゝるやいなや、あちこちで救援を依頼する声、再度元気な人集めを婦人の方々に依頼、数名づゝに分かれて当町内で約16名程、救出。気がつけば午後1時前。役員数名で町内をパトロール、崩れた家も多数あったが御家族は元気ですかと声かけて、危ないから家の中には入らない様、落ちついてからにはと注意してまわる。御婦人達は道を通る人にガスの臭いがしていたのでタバコの火を消して下さい、電線にさわらない様注意してくれていた。そして火災がなくて良かったねと肩をたゝき合っただけで喜んだ。この時自治会の有難さと会員の協力、お互いのきづなの強さをひしひしと感じた。その後、午後2時30分頃一軒の店舗から出火、会員がホースを引いたり交通整理等協力した。又ガレージから車を数名づつで出したり全員で消火に参加協力した。

町内の道路に散在している材木、焼跡の燃えかす等整理、住民の避難先の確認等、行政がなかなかしてくれない分野を我々の手で出来る事は、住民で協力し合っただけでやった。皆がこの町を愛しているから……………。

1月27日頃から火災保険の請求、出火元への陳情等に奮起。一応自治会活動は休止してその代りに魚崎北町復興委員会を発足する。復興委員会で、清掃、薬剤散布、夏のラジオ

体操、焼肉パーティ、もちつき大会等行事をして住民の融和、落ちこんでいる皆様方の元気づけにお互い協力、焼跡の整理、測量、測溝、私道の拡大に、住民の協力を得て今後この町で隣、近所の人々が仲良く暮らせるよう、住民の話し合いで復興も他の地域よりも、早く出来たように思う。自治会々員の中には、色々な職業の方がおられ、ガス、電気、水道等の引込みの交渉、建築に対するアドバイス、道路の復興の交渉等、その道々で協力を出来た事がよかった。今後も自治会活動を推し進めて行こうと思っただけではいるが、まだまだ住民がもどって来ず又、更地に高層マンション等の計画もあり、元の自治会になるのにはもう少し時間がかゝると思う。1日も早く皆が愛する魚崎北町へもどれることを願っている。その日が来るまでがんばって行こう。

震災前より良い町を

魚崎北町5丁目自治会

河合謙二郎

4月下旬、ようやく元の地に家を再建、長年住み慣れた魚崎に戻って来ました。小さいながらもわが家での生活に心身とも喜びがみなぎってくるのを押さえることは出来ません。まだ多くの人々が不自由な仮設住宅で生活されていることを思えば幸せであるとしみじみ感じます。それにしても、昨年1月17日午前5時46分の大地震はこれからの生涯、忘れようとしても忘れぬことの出来ない出来事でした。

地震直後、幸いにもわたしの家は屋根瓦が落下する程度で崩壊は免れました。もちろん、部屋の中はテレビが跳びはね、書物は散乱、タンスや食器入れは倒れるなどかなりの被害がありました。しかし、一家4人かすり傷の一つもなく、周囲の状況から考えると幸運の部類だったと思います。魚崎の町は信じられないほどの崩壊ぶりでした。あちらこちらで家屋の下敷きになった人達が救いを求めています。

地震の恐怖が去った後、まず何よりも生き埋めになった人達の救助をと、駆けずり回りましたが、いかんせんノコギリ一本もない始末、積み重なる木材を取り除くことは並大抵のことではありませんでした。つい先程まで息をしていたのに、いつのまにか冷たくなって、遺体として引きずり出さなくてはならない悲しみもありました。避難所の横屋会館には恐怖に顔を引きつらせた人、呆然と座り込むお年寄り、それらの脇に運び込まれる遺体、まるで悪夢のような情景でした。

わたし自身は、新聞社に勤めていることもあって、一段落した昼間に会社に出掛けました。あのときの妻や娘の心細げな顔が忘れられません。午後、付近から出火、わたしの家

を含めて百戸を超える家屋が全焼してしまいました。予想もしなかった出来事でした。地震ではさして被害のなかったわが家がこんなことで消滅するとは、情けないやら悔しいやら天災とはいえ、あきらめ切れないものがありました。その後、垂水区学が丘の団地に仮住まいをしました。

まさか神戸にこんな巨大な地震が襲うとは、自然に対する過信と油断であったと思います。しかし、この地震で実に多くの人から見舞いと励ましをいただきました。その中には火災で何もかも失ったという事を知った大学時代の友人が、学生時代の写真を送ってくれました。また、仕事関係の知り合いも、これまで旅行などで撮影したスナップ写真をアルバムに仕立ててくれました。数多い見舞いの品物の中でも、この写真の贈り物には思わず涙ぐみました。人の情けの温かさをこれほど痛感したことは、正直、わたしの人生で初めてのことでした。会社で家庭で、数多くの人々の励ましを受けたものと思います。「一日一涙」というか、本当に感謝で涙の出ない日はなかったと思います。

地震以降、いろんなことはあったが、とにかく元の地に戻れたことは幸せだと思います。

魚崎の町も地震の前と今とでは随分と変わってしまいました。新しい家が出来る一方で、まだ多くの場所がさら地のまま放置されている姿を見ると心が痛みます。さらにまだ多くの人々が仮設住宅での不自由な生活をされている訳で、一日も早い住宅の復興を願わずにはいられません。道路もいたるところデコボコ状態、道路を走る車も以前に比べるとマナーが悪くなったような気がします。

しかし、思えばこの震災でわたしたちは多くの犠牲を払いました。また多くの教訓も学びました。これからは以前にも増して安全で快適な町を作りたいものと思っています。それでないと、なんのために多くの犠牲を払ったのかわかりません。

そのためには何と言っても住民同士のコミュニケーションが大切だと考えます。震災では恐怖を味わい、多くの苦しみ、つらいことを体験しましたが、反面、人と人との結び付きの力強さ、人の情け、温かみも知りました。震災からまだ一年半が過ぎただけにやむを得ないかも知れませんが、なにか町の風景がギスギスとした殺風景な感じがしてなりません。道路がほこりっぽいせいか、緑が少なくなったためか、やたらとマンション建設が増えたためか、いろんな理由があるでしょうが、以前よりも環境が悪くなるのでは困ったことです。

魚崎は生活をするうえでとても便利な地です。古くから住んでいる人も多く、人情味のある町であると思っています。この魚崎の町をもっともっと住み良い町にしたいものです。震災でこの町は大きな被害を被ったのですが、禍を福に転じるよう、住民が手を携えて新しい町作りに進むよう願わざるを得ません。

かたく手を握って和になろう

魚崎町横屋自治会

会長 原田吉堯

魚崎横屋自治会は設立14年です。昭和13年の阪神大水害にて土砂に埋もり多大な被害を受けこのような時に備えて、初代会長発案により各家の月会費150円の内、年5万円の防災基金を別会計に記帳、阪神大震災時には総額80万円となり、被害を受けた準会員全戸に御見舞金として支給する事となり役員二名で傾いた家の軒先を通り各家を廻り全戸数の配置図を色エンピツで塗り全壊、半壊、亡くなられた人達、数十回にわたって調査致し3月頃で124軒に第一回として1軒5000円の見舞金を支給し現在第二回と支給を致しています。

皆様にお渡しできて本当に良かったの一言につきます。今年からもこの防災害基金積み立てを続けて行きたいと思えます。

又隣接自治会に於いては90軒に及ぶ火災により全焼し西側に到っては消防自動車も水道の水が出ないため50mも離れた井戸より自発的な人々によりバケツリレーによる消火活動ができ延焼を食い止め被害の拡大を防ぐことが出来ました。又、各家庭より持ち寄られた消火器数十本により生理めになっている人救出の為使われた消火器の威力の広大さを痛感致しました。今後各家庭にはぜひ各一台常備する事を提案致します。一日も早い復興を元の町に復旧する事を願って止みません。

大地震

魚崎ハイツ自治会

会長 高島 孝 男

平成7年1月17日早朝の事である。朝の5時過ぎ頃妻が用便に起きた。寢床に入ると妻はすぐ寝入った。私達は鉄筋コンクリート建て5階建のマンションの4階に住居する妻と2人住いである。8畳の和室で寝起きしている。東側がベランダで室内は北側に洋服ダンス並んで整理ダンス続いて押入れ、南側は東から机本棚が並んで本棚とその上に飾り棚が上に重ねてある。西側に桐ダンス、テレビ、等が並んでいる。鴨居周囲には額縁が拾数枚掛けてあった。私は妻が用便に起きてからなぜか目が冴え暫くの間唯煙草をふかしていた。それから何十分くらいしてか、新幹線でトンネルに入る時に生ずるやうな異音。地鳴りだと思った途端寝具と體共々約20cmも浮き上がったような感じ、続き南北に大きく揺れだした。横に寝ている妻に「地震だ地震だ」と呼びかける。妻が半身をおこした直後電灯が消え各ダンスが倒れだし額縁や天井からは電灯等が落下する。飾り棚が私の頭上に落下「一瞬目眩いとなった」真暗い中先づズボン防寒着を探し身につける。懐中電灯を探し出して、次の間を見るに、食器棚、冷蔵庫、炊事場の袋棚等中に入っていた物が、すべて飛出し倒れた物共々滅茶苦茶で一面硝子破片等で足の運びやうにも一苦労足の裏が切れ血が出ているのもその時は別段気にもかからず、向いの号室に居住する三女が入口玄関戸を叩き乍ら「お母さんお母さん大丈夫」と大きな声で叫んでいるが、なかなか玄関迄行けない。やっと入口戸を開け長靴を探し出し履き妻にも履物を探し履かせ娘一家五人共々に一階迄階段を降り前庭駐輪場へと出る。マンション20世帯の殆ど無事であるとの様子だが一階建物の

前庭でガスの臭いがあるので煙草等火を使わないやう注意する事を呼びかける。私事乍ら私は兵庫県公安委員会任命地域交通安全活動推進委員と東灘警察署管内中部地区「地域ふれあいの会」副会長委嘱を拜命しておりますので、予震中乍ら再び居間の4階迄逆り制服に着替安全保安帽白の手袋にメガホンと必ず役立つと思ひ大きい鉄パールを持ってまだ暗い中を近所から見廻る事にした。何分にも此の辺は古い木造の家が多い為ほとんどの家屋が全壊していた。先ず南側の隣家から声を掛ける2軒隣りのK氏67才が潰れた2階で倒れる物体に八方塞がり身動きが出来ないとこの事。此の時魚崎ハイツに居住する高校二年の男子「山本君」が私のパールを持ってよじ登り窓硝子をパールで割り中にもぐり込んで助け出した。この時山本君は割れた硝子で大きく切傷を負ったの救出でその勇敢さに大いに感激した。次に南に潰れた家に声を掛けると夫婦二人が元氣だが出られないとの事。瓦礫を踏み越え誘導して無事道路迄助け出す事が出来た。この頃夜も明け出し朝が来た。此処で困難な事が生じ始まった。それは報道の為各マスコミ社のヘリコプターの爆音である。爆音である。一戸々々潰れた家をメガホン呼んで見るが、爆音で聞きとれ難くなった。次から次へと應答の有無を捜し廻る。甲南町四丁目の或る文化住宅のM氏方で夫婦が生き埋めになっている。小さ細い声乍ら應答があり一階分迄掘り降りやっとの事で夫婦共助け出した。この時近所の人々四、五人が手傳つてくれた。もう一人隣の老婆が埋っているとM氏の言葉に又屋根部分から1階迄瓦礫を取除き助け出したが、心臓も脈も止っている。が体温がまだある。皆なで心臓マッサージ。口に口を直接付けて息を吹込み約15分程続けた。すると見事に蘇生したので畳に乗せて住吉川病院迄運んでくれたが病院もパニック状態であり廊下に置いて看護婦さんに頼んで帰ったと報告がありしが、後程聞いた処に依ると約

2時間後に亡くなったとの事。もう一人四丁目で婦人を助け出そうとして居る。現場で手傳って救出、畳に乗せて病院へ運んだがこの人も病院にて亡くなったと聞きました。この時も近所の人が数人應援してくれました。亦もや近くで救出作業中現場を見付けた。男性だと言ふ。皆で協力して何とか救出出来たが軽い怪我だと聞いたが大分衰退しているとの事。尚四丁目で80才位の男性が埋っているも一軒Nさん60才位の女性埋っていると聞いてメガホンで何度も何度も呼んで見たが應答無く他方面移動する事にした。道路も倒れた電柱や瓦礫の散乱。進行には相当の時間を要した。魚崎北町五丁目に居住する長女のマンションも大丈夫だったので一先づ私達は三女一家と共に避難する事にした。感じて見ると朝から水も食事もしてなかった。

しかし魚崎五丁目で地震発生後およそ8時半頃火災が発生した。消火する水も無いので消防隊員もなす術も無く唯右往左往するだけの様子で何とかして延焼を止む方法を協議し合っていた。私は鳴尾線の車の整理するに勢一ぱいであった。無我夢中で動き廻っていたが火事も少し下火になって来たので長女の居宅に帰って行った。早や9時頃になっていた。昨夜から始めての食事であった。考えて見れば飲まず食わずの一日であった。此の夜は電池ラヂオとローソク懐中電灯で夜半頃迄起きていた。度々の予震もあった。翌日東灘区御影浜町の埋立地で液状化したプロパンガスのタンクからプロパンが漏れだして引火すると大爆発が起る危険があるとの情報に依り最初住吉川より西側の人は国道二号線から北側に避難するようにと云ふ事になり、更に田中町甲南町も同じく国道二号線より北側に避難せよとなりメガホンで叫んで廻った。特に灘高校第二グラウンドに自衛隊の駐屯車の使用する為早く避難して下さいと公報して廻った、防衛隊員は続々と来神。東京からは警視庁、大阪、京都、名古屋、和歌山、岡山、廣

島等続々と来神、それぞれの部所で活動して下さった。私は自衛隊員に同行して生き埋めになっているだらうと思われる倒壊した家屋個所を案内協力して遺体搬出に二日中動き廻った。自衛隊員の活動振りに大勢の人々が自衛隊を見直し高く評価すると言ふ声を多く聞きました。私事ですが10年程前から狭心症の持病があり平成2年11月には心筋梗塞と脳梗塞の発作を同時に起し入院治療した事があり未だに心臓治療に通院しております。20日になって、一族揃って大阪富田林の二女宅へ避難する事になり甲南からガラガラの国道二号線を二度三度休憩（ニトログリセリン薬をもっていない為）、約1時間40分程か、ってやっと阪急西宮北口駅迄歩き電車を乗り継ぎ乍ら富田林に着くと同時に駅前の病院に心臓治療手当を受ける事が出来ました。そして東灘に電気が復活した1月末頃神戸に帰りましたが市立本山南中学校登校路の生徒交通安全の指導には朝7時半から8時半迄補導しており尚クリーン作戦市民委員として国道2号線南北歩道並び近辺の側溝等のゴミ掃除は今も続けて居ります。だが神戸復興はこれからだ!!

大震災を顧りみて

野寄財産区管理会

会長 石本 登

何とも警えようのない響音がした瞬間に「ぐらぐら」と揺れはじめた。暫らく様子を見ていたが落ち着いても居られない。足の踏場のないほど散乱した部屋を手さぐりで戸外に飛び出した。近所の人達も呆然として道路に立ちすくんでいた。「痛いよ痛いよ」と隣人のお年寄りが呼んでいる。くづれ落ちた天床梁に足をはさまれている。何処かへ運ばねばと二人で足と頭を抱え会館の方へと向った。

既に会館には地域の人達が避難してその数も次々と増えて来る。「炊き出しせなあかんで」何時も祭りその他の行事でお手傳して頂くとご婦人方が手配をしてくれる。誰れ言うことなく「テント」の設営「炊出し」の準備が手際よく進むが尚余震が続く。心配と不安が益々募る。

毛布、布団を抱え陣取りが始まっている。会館福祉センター共満杯だ。

「トイレ」の水洗が出来ない、生理現象の処置だ。幸い振動で水脈が変わったのか一滴もなかった側溝に溢れんばかりに水が流れている。

「トラック」にドラム缶及ポリ容器を積んで水運びが始まる。先づ一安心だと思いう間もなく「シートは有りませんか」「何処へ行けば頂けますか」、「シートはありますので何んとかお願い出来ませんか」と尾根覆いの依頼が来る。

「何んとか手伝ってやれよ。屋根はすべるから気を付けてな」青年会の人達に頼むのも心苦しい。皆んな我が家も被害に見舞われていながら駆けつけて来て呉れているからだ。

誠に有難い。何時間か何日経ったのか記憶はさだかでないが、電気も復旧した。被害の

状況が次々とテレビに写し出される。想像を絶する凄惨な悲しい惨状だ。自然の偉大さ恐ろしさに驚く。幼い頃にも時々地震があった。

「また和歌山のみかんが落ちたんやろ」の暢気なことを言っていた頃を思い出す。

給水も始まった。附近は人と車でごつたがえしどこかの国のバザールの様な賑いだ。

行政からの食事及救援衣料その他の配給も始まった。連絡の電話も頻繁になる。

一応避難生活も落ち着きを見せ始めた1月の末大阪玉姫殿の方が来られた。「温水シャンプー」をしたいとの事である。設備に対する条件が満たされているかの下検分である、水の確保、電気、場所の広さもOKである。翌日早速に設営が始まった。これから十日間の奉仕である。1日100名位消化出来るそうだ。

女性にとってこんな嬉しいことは無い。準備も完了、2月1日からのスタートだ。

玉姫殿のスタッフと共に各避難へのチラシ配りが始まる。最初は女性だったシャンプーも終り頃には男子も恩恵を受けた。実施期間中約1600名である。又この期間給食のサービスもあり「お好焼」「天井」「カレーライス」「焼鳥」など日替わりメニューで避難者だけでなく近所の人も器物を持って3人分、5人分だと拾ってかへる。

派遣された人員延300人余りに達する。殆んど大阪、京都近辺の方々である。

交通の便は当時阪神青木までしかない。

倒壊した家屋ガレキの山を避けながら40分は充分かゝる。8時半到着9時からのシャンプーだ。遠方の方は5時頃には家を出る。送迎用のバスも持っておられる。こんな経験はめつたにない若い者には少し苦勞をさせた方がよい、被害を受けられた方々の事を思へばと斉藤社長のお言葉である。隊列を組み整然と又テキパキとした行動は社内教育の現れであろうか、10日間はアット言う間に過ぎた。

「出逢いがあれば別れがある」次の被災地への移動である。お別れの夜地元でお世話し

てくれた方達を招いて「パーティ」まで催して下さった。復興のため頑張ってお礼の言葉を述べさせて頂いたが万感胸に何故か涙が先に立ち言葉にならなかった様に思う。

この外県内県外よりも多くの「ボランティア」の奉仕のご連絡もありながらスケジュールの都合でお断りする事態も生じた。改めてこの紙上をお借りして御礼を申し上げます。

最終第4次の仮設の抽せんに当り出て行かれるまで約4ヶ月いろいろの経験をさせてもらった。暖い人の心にふれ、又行政の対応がどうのこうのと不平の声も耳にする。経済大国と言われ物の豊富な平和な暮らしに浸りすぎ、「今日もにぎり飯か」「又パンか」と戦中どんなであつたか思い出せば贅沢な話であるが時の移り変りを覚える。我田引水で恐縮だが小生も昭和13年六甲の山津波、戦中はシベリヤ抑留、又此度の地震だがもうご免蒙りたい。

而し復興への道は峻しい、行政の手腕に期待する処大であるが個人個人も苦境に耐え頑張らなければならない。自分自身に負けたら終りだ。此度の件で尊い命を奮われた方のご冥福をお祈り申し上げますと共に各方面より暖かいご支援を賜り紙上をお借りして厚く御礼申し上げ臙げな記憶を辿りつつまとまりのない文ですがお許を賜りペンを止める次第です。

この一年のうれしさ・悲しさ

本山第2住宅自治会

会長 龍田 健

震災直後四～五日は、母の安否、家族の住家の確保等で、自治会には全く協力できませんでした。(震災時点では、私は民生委員ではありますが、自治会には関与しておりませんでした。)

平成7年1月29日にやっと自治会の臨時総会を開くことができ、自治会資産(600万円)の処理や今後の方針について話し合いました。以後、話し合いを繰り返していききましたが、会場は、住宅の集会所など使えるべくもなく、本山南小学校の運動場と校舎2階の廊下という現状でした。第2住宅復活推進委員会本部も、廊下の片隅の机4つ分でした。

2月10日に1世帯当たり2万円を返金し、その時の領収署名等をもとに、自治会名簿を作成しました。その際に多いに役立ったのが、神戸市役所本庁からだまってもらってきた「私はここにいます」カードでした。そのまま個人カードとして使うことができました。

ただ悲しいことに、居住者の連絡先の大半が、6年2組、理科室、体育館等で、本来の住所にはなりえないものでした。

それ以後現在まで、自治会名簿は約10回ほど作り替えています。

3月末までは、電気、エレベーターの復旧等の陳情で度々市役所へ行きましたが、代替バスあるいは徒歩で道中は大変疲れました。

陳情で特にありがたかった(うれしかった)ことは、3棟のうち1棟(3号棟)のエレベーターが復旧できなくて、住宅管理課(大山主幹)が人荷用リフトをつけてくださったことです。解体が決まり、互いに辛い思いに沈んでいるのに、家財道具の搬出もままならないやり切れなさからなんとか抜けでることがで

きました。

この一年間をふり返ってみて、一番残念だったことは、神戸市長の「顔」が見えなかったことです。雲仙普賢岳の市長は、ほとんど毎日テレビに出て、市民の方の心の支えになってこられたように思います。

神戸市は、緊急生活物資、仮設住宅など「物」の提供はなしでも、市民の傷ついた「心」の支えにはならなかったのではないのかと非常に残念に思えてなりません。

私のような者にさえ、今でも一日に2～3件、住宅情報や生活不安などで電話をくださる方がいて、それに対してできる限り誠意をもってお話しさせていただくことが、私の心の支えになっています。

また、特にうれしかったことは、私の仕事場（修学塾）のある本山南町2丁目では、自治会長の中西輝夫さんのお計らいで、大阪市の井手英男さん、藤井憲二さんをはじめとする天理教城東支部の皆さん（延べ約1500名）が震災直後から3月末までの土曜、日曜日に来てくださり、町内すべての家屋の応急補修、カレーライス、とん汁などのたき出しをしてくださり、本当に勇気づけられありがたく思いました。（ボランティアの皆さんは、3月以降7月末ごろまで、西光寺のかわら落とし、保久良神社の補修、神戸商船大学に避難している方々の支援などをしてくださいました。）

一年を経過した今日でも、さまざまな、生活不安、癒しがたい心の傷を負って生き続けなければならない人々が数多くいます。

どうか市長自らの「顔」を見せていただき、そういう方々に温かい励ましと、生活支援のきめ細かな対応をお願い致します。

阪神淡路大震災に於ける本山南町2丁目自治会の記録

本山南町2丁目自治会

会長 中西輝夫

一、震災前の会員世帯数 360世帯

震災時の残存会員世帯数 73世帯 240名

一、震災当日は会員の安否確認と倒壊家屋の下敷になつた人の救出に又水道ガス洩れを止めまわる工具道具の不足と震災余震で作業進まず11名が死亡。消防警察の応援なし。区役所との連絡は自転車。

一、死者の検死検案書うけるため自家用トラックにて指定場所へ搬ぶが交通渋滞のため2日がかかりになった。

一、検死終了納棺順に引きとりに行く、うち一名は神戸医大と遺体献納契約者があり警察におまかせした。火葬は岡山、和歌山、能勢、姫路等各自手配。

一、救援物資が区役所に届きはじめた。連絡すると各町内毎に責任者決めて確実な人数がわかれば取りに来て呉れとの事。町内で再確認し避難所の人を除いて240名分申込み引取り始まる。事後3月27日まで続いた。

一、電気は1月下旬

水道は3月中旬

ガスは4月上旬の復旧 一応普通の生活のできる準備はそろった。

一、他地域へ避難移転した人の住所等調査連絡方法きめる。

一、三者協定に依る損壊家屋取こわしの申込み者まとめる。計26戸。5月11日契約日指定。危険なものから順次とりこわし5月20日申込分完了。半壊者は自費修理始めた。

一、各自宅半壊等屋根瓦損傷家屋に自前のシート約60枚配る。不足の分は区役所より50枚貰って屋根にかける。

一、1月25日より大阪市城東区の天理教城東支部の井出英雄支部長初め約70名毎週土曜日

がら処分、塀の片付、シーートの張り直し、家具の片付け、建具の調整等6月末までボランティア延合計1400名のひのきしん受る。当日の夕方は温いものの炊出しをして頂く、商船大学体育館の炊出しは7月末まで続けて頂いた。

一、亀岡青年商工会議所より炊出し昼の部ボランティア2月と3月で6回こられた。会員と共に喜んで頂く。中田智之氏、石川清之氏他10名。

一、広報や各種資料、区役所で頂き掲示板又役員宅の家で張り出して全員に周知を計る。

又コピーを配布してほゞ行渡ったと思う。

一、3月5日、神戸市民ホールで合同慰霊祭あり。

一、5月中旬より住宅金融公庫と神戸市復興資金等の契約済の住宅が建ちはじめた。8年3月現在近隣では倒壊家屋の6割が新しく建設されている。街燈が少なくなったので自治会灯3ヶ所増設の他新築の方々には門燈とベランダカベ灯を御願して道路が明るくなる様協力して頂いてる。

地震と家屋解体の時に側溝がほぼ全滅状態なので各自の家の前は建築工事の時修理して頂く様御願ひしている。いづれ市へ一括して修理申込したい。

一、3月現在自治会々員数は他地域より帰神又新築により帰られた家族等で120戸まで回復している。約半数は元の地へ戻られて来られた。

一、4月上旬自治会総会開催予定準備中。

一、うれしかった事

救援物資の配布があつて食糧水等に不安がなかった事。

近隣の皆様とより一層仲よくなった事。お互いに顔み知りになれた。

ボランティアの人々に大変お世話になり元気づけられたこと。

生活ライン水電気ガスが復活した時。

一、困った事等

水道の止った時トイレの使用できなかった事。

震災の2~3日位は何をして良いかわからなかった。区役所へいろいろ聞いてみたが適切な情報や連絡がうまくとれなかったこと。

近隣の対処の爲と物資の引取り等で家を3ヶ月間空けられず仕事ができなかったこと。

交通渋滞には今でも参っていること。

復旧工事が本格化すれば益々道路事情が悪くなり騒音と合せて生活リズムがこわれるのではないか。解体工事の時は全くひどかった。

一、自治会があつた御陰で今回の災害に際し皆一体となつて話合い助けあつて理解の深まつた事に関して会員の方々に感謝しています。

今後はより一層地域発展のため努力されるものと確信しています。

テント村の避難者の行動に対して一部の人以上より不満が出ている。

自費で住宅等確保した人には地域によって何の物資の補足もないし援助もない。

建築基準法違反の住宅が見受けられるが、正直に建てている人と無茶をする人とは同列に扱つておられるのか。自治会内の事ではお互い気まずいので顔を合わせても苦情が云いづらいとの事。この点の市の指導は如何なつていますか。又改善されるのでせうか。

近況

1、平成8年12月上旬会員数184戸、建設中約10戸

1、ボランティアグループへは会員有志20名程で御礼に伺つて交流を深めました。

1、会員日帰りバスツアー40名参加。カラオケ大会開催。

中野南公園清掃ボランティア始める。

震災当時のジークレフ本山南自治会の活動状況

ジークレフ本山南自治会

元会長 杉原正則

ジークレフ本山南自治会は神戸製鋼所の社宅住民のみで構成されており、従って普段から近隣の方々とは殆どつながりもなく、独自の活動状況にある。

震災発生時、社宅敷地内は非常に静かだった。みんな夜が明けるのを息を潜めて待っているようだった。辺りが白み始めると、やっと人の気配がし始めた。お互いに安否を確認め合い、幸いにも一人の死傷者もないことが確認できた。しかし、次第に入ってくる他の社宅や会社の情報とさらに周辺家屋の倒壊を目の当たりにし、これからどうなるのか不安は募ってくるばかりだった。そのうち、会社から食料その他状況に応じて援助があったが、一時社宅を離れるか残るかの判断は、各家庭それぞれに任された。日が経つにつれ、思ったより住居、地下ライフラインの破損が激しく、会社から約一カ月半の退去指示が出され、その間にその補修、補強が行われた。

3月1日の再入居許可後もなかなか住民が戻らず（子供の学校の事情等）自治会としても活動できない状況にあった。しかし、そのころのゴミ置き場の状態は、神戸市の清掃車が既に稼働していたにもかかわらず、生ゴミ、ガラス、壊れた家具などでつねに山積みとなっていた。そこで、とりあえず入居している方の協力を得、ゴミ置き場の整理にとりかかった。最初は整理してもすぐに次から次に多種多様のゴミで満杯となり（どうやら社宅外から投げ込まれるようだった）、結果、「神戸市が早くもとに戻るよう協力しましょう。」と書いた札をつけたロープを張った。これには少なからず効果があったように思う。小さな一歩ではあったが、混沌とした状況から少

しでも早く抜け出したい気持ちは、みんな一緒であったと思う。

3月末には殆どの方が戻られたが、転勤者の多い故、これからの神戸に不安を持った方もいて東京に逆単身を選ばれた方もおられた。又、震災前から会社の方針で社宅再編成が行われていたことと、今回の震災により全半壊した社宅と周辺地区の家を失った社員の住居の確保などで、しばらくの間、社宅住民は流動的であった。しかし、震災から2カ月も経つと、変則的でありながらも自治会の機能を戻さなければならず、しかも役員全員そろわない状態での事項決定は、はなはだ心許ないものだった（自治会費、廃品再開等）。

今回の震災では、社宅は一般住宅とは違い、当然ながら会社とは密接な関係にあることを再認識させられた。社宅に居たことにより、この度は被害も最小限にくい止められ、また不自由な生活の中でも比較的安定した生活を送ることができた。このことは逆に周りの様々な形で苦労、苦痛を味わっておられる方々に対し、いささかの心の痛みを感じた。

個人として、震災時の援助、ボランティア活動をされた方はおられたが、自治会としては上記のような状況から、会社からの枠をでることがなく、震災に関しては特に記するような地域活動はしなかった。

以上

震災を偲ぶ

森南町東部自治会

会長 徳 森 啓 祐

17日 5時46分、妻とは別の階に寝ていましたが、先ずタンスの下敷きになっている妻を引きずり出し階段を降り外に出て見ると、廻りの家は全滅でした。

重量鉄骨2階建て、一部3階は3センチ程西北に傾いています。

近所の人達が大勢集まって来られ、「寒い。着る物を履く物を下さい。」余震の中を二階迄走り上がり出せる物は手当り次第窓から外に投げました。夜も白々と、明ける頃は、あちらこちらから「助けてくれ、助けてくれ」の呻きと、叫び声。

皆で手分けをして、8人程掘り出しました。懸命に助け出しても、すでに亡くなって居られた方も、4名か5名有りました。

ガスがなかなか止まらず不安でした。

家の電話が使えませんでしたので電話を掛ける人達が並びました。

又此の人はどうなった？どこに行ったか、どこに居るか、等々役所の様な連絡係もしました。

又御遺体を安置所まで、住吉川を4時間も掛かり運び（2体）、まだ、2体が夜も12時近くに成るが、ふとんにくるまって置いてあり、119に再々電話しました。やっと通じ、夜中の1時頃に自衛隊か何か引取りに来てくれた。寒くて、余震の中、下敷きになっている犬の苦しげな呻き、1人での監視は今思い出してもよくやったと思います。近所の人も家族もみんな学校に避難しました。

20日か、21日頃でした。電気が通じ、以前から出していた（井戸水）のつぶれた倉庫にもぐり込みポンプの保修、ズタズタに折れたパイプを繋ぎ合せ、水が出た時は皆が抱合って

喜び私も涙がでました。水の有難さをしみじみと感じた。毎日夜も昼も水汲みの列でした。皆さんも疲れ切って静かでした。

私も水汲みの手伝いをしました。

学校や公園に避難していた人達、居づらく成ったとかで、あちらこちらとテント村が出来始め、私も水の配達をしたり、道路で炊き火をし、大鍋で湯を沸かし浴槽に運び、皆さんに風呂に入って戴く日が毎日続き、喜んで下さいました。家を2軒分くらい燃やしたき火に不自由はなかった。今でもアスファルトが燃えた後が深く残っています。

近所の人達や子供達の家族、猫1匹等大勢が同居する様に成り、家が狭く私が1人は引き出され、独身寮に今も居ります。

森南地区には、森南中央自治会が有りました。20年以上活動をしていません。

更地ばかりでぶっそうだから早く自治会をつくろうとの事で、7年11月、投票により、無理矢理に私が選ばれ、神戸の一番東で有り市政からも忘れられがちだと云ふ事から、東を入れ森南町東部自治会と命名、生れたばかりで今は組織づくりをして居る次第です。集会所も無く、2回程役員会をしました。困って居ります。

余計な事ですが、都市計画の副・森南運営委員、納税協会委員、都市協議委員会に置いても皆さんの意見も定まらず、家を建てたい人も帰りたいたい人も大勢居られます。困っています。山手幹線が早く抜けば13メートルの道路も不用だと思ふ。

比の度の震災が有って、一人一人の和ができ助け合いの優しい心のつながり、不自由はあっても毎日を楽しく過ごした事をいつまでも忘れたくない。

70才のじじい。

岡本山手自治会

会長 田中正三

私は大震災の日はカナダの息子の所にいました。平成7年1月17日朝はトロントでは16日午後3時に当ります。5時からのTV〔C. N. N〕を見ていると神戸市のNHK支局の室内の大揺れが出ていました。それから長田方面の火事が報告されていました。孫娘が私の家（岡本5丁目）に電話した所、家内からの返事で家の方は被害がないことが確認されました。

私はカナダ時間18日の朝日本に帰る予定でしたので、すぐエアカナダ航空に電話しましたら、私の帰る予定の飛行機は関西空港に向かって飛ぶと云って居りましたが、関空から岡本迄の帰路がどうなっているか分かりませんので、翌日の出発はキャンセルし様子を見ることにしました。

近くの日本人がトロントで印刷されている読売新聞（衛星で送ってそのままトロントで印刷している）を買っていてそれを家にとどけて頂いたので、毎日それを見ていました。東灘区の被害は特に大きく山手幹線と43号線の間で被害が特に大きかったことが報告されています。

2月8日に神戸に帰りましたが、未だガスラインは復旧していませんでしたので風呂は入れませんでした。

家内に聞きますと18日には青年会の人達がきて布団や毛布を供出した様でした。又18日19日は炊出しをした様です。自治会の80数軒の家は1軒だけ半壊がありましたが、その他は被害僅少でした。（岡本5丁目、本山北町六丁目）自治会としては援助活動をすべきだと思いますが、実績がありませんし費用もありませんので見ているだけでした。その点感

心したのは自治会のメンバーに教会がありますが、そこにはアメリカの数人の人間がきてボランティア活動をしていました。私の家にもニュージーランドの大学に行っている東京の娘さん（家内の知り合い）が二週間程とまりがけでボランティア活動をして帰りました。

私が現在の岡本五丁目に新しい家を求めたのは昭和39年でした。その時には今の「本山コーポ」は建って居りませんでした。それから41年の月日が経過いたしました。今回の神戸大震災について東灘区が最も死者が多く1500名も出たことに関連して、平成7年9月20日と10月13日に毎日新聞に出た東灘区の南北断面図が参考になります。

この断面図だけではも一つ振れが増幅されるメカニズムが充分説明できませんが、断層を含む東西の平面図があれば振れの反射波による増幅が説明できるのでは無いかと思われます。私の住んでいる所〔阪急電鉄から数100m北〕では「たい積層」の厚さが薄く下は六甲山系の岩盤であるから、17日の震災の時の震度は4～5位ではなかったかと推定いたします。その私の所に送られてきた神戸市水道局「水とくらしNo.79」に「配水管被害多発地区の分布」と云う図面に震度7の地域と云う平面図がのっています。これを見ますと震度7の地域は堆積層の中央部に分布して東西に走っていることが分ります。

シャンボール第2岡本 阪神大震災被災の手記

シャンボール第2岡本管理組合

理事長 新 居 忠 彦

私達の住んでいるマンションは、森北町6丁目7番26号の傾斜地に建つ4層の集合住宅です。4戸2列で1ブロック8戸、全体4ブロック32戸からなっています。管理組合は、1列4戸から1名を当番で、全体から8名の理事を構成し、互選で理事長、副理事長、設備、業務、会計を決めています。私は当時理事長をしていました。

このマンションは1977年（昭和52年）春に竣工しましたので、築後18年で阪神大震災に遭ったこととなります。地震の被害は、建物各部に微細な亀裂が生じたものの、全体としては一部損傷程度ですみました。

このマンションは、32戸全戸に電気温水器が設置されており、震災時には殆どの家庭の電気温水器の配管が破断し、一部の家庭では給湯缶が転倒しました。

地震直後、自分の家の電気温水器からの熱湯噴出を止め、廊下に散乱している家具を整理し、その後外へ出ました。一部の家でまだ電気温水器から熱湯が噴出していたので、止めるのを手伝いました。業務担当の理事も外に出てきたので、建物の安全を確かめるため一緒に外回りを見て歩きました。

電気温水器の配管の都合上、洗面所、風呂場、炊事場の水道は、電気温水器の修理を行わなければ水道水が来ないこと。電気は3種類の電気があるので、配電盤が複雑であること。ガスは地震時、メータの処で自動遮断されているが、自分勝手にさわってはいけないこと。停電時はマンション私設の污水排出ポンプが動かないので、トイレ等の水を流さないこと等々を各理事を通して各家庭に連絡しました。

各家庭に連絡しなければならない事が生じた場合、その理事は理事長に連絡し二人でそれぞれ他の3理事に連絡し、各理事から全家庭に連絡する事にしました。

電気は当日の深夜復旧したので、非常に助かりました。マンションは電気が無ければ、どうしようも出来ない所です。

水道は2月上旬迄復旧しませんでしたので、当日は牛乳等ですませましたが、次の日から近所の湧き水を沸騰殺菌して飲みました。3日目に住吉川阪急電鉄北側に給水所があることを聞き、自転車で水を貰いに行きました。1週間後は大阪市等の応援給水車が来ましたが、従って飲み水はどうか確保出来ましたが、トイレの水には困りました。近所に高橋川と言う小川がありますので、この小川の水を汲んできてトイレの水に用いました。

ガスは3月上旬迄来ませんでしたので、当日深夜から通電した電気で調理しました。なお1週間程後には、スーパーで携帯用ガスコンロを購入したので、これで調理しました。

ゴミは当然収集出来ないのので、各理事を通し全家庭に絶対出さないよう注意し後日収集車が来た時、それを聴いた人が次々に連絡しゴミを出しました。（このことは当マンションでは完全に守られました。また給水車が来た時も、この連絡システムを用いました）

震災直後、近隣の数カ所から黒煙が上がりましたが、サイレン等の音がせず異様な雰囲気でした。また南方面に住んでいる当マンションの親類の方が徒歩で歩いて来て、「下は（南の方）大変だ、まるで地獄のようだ。」と教えてくれました。他の理事の人と二人で、JR神戸線まで降りて行きました。国道2号までは家屋が道路上に倒れ、とても歩ける状態ではありませんでした。当マンションの指定避難場所は本山第三小学校ですが、とても避難出来る状態ではありませんでしたので、万一避難が必要な場合は、稲荷神社の方がより安全で、しかも近くて安全に歩いて行けるの

で、稲荷神社を臨時避難予定場所にしました。

19日、「阪急西宮北口迄行けば、電車が動いている」と聞いたので、近所の人と一緒に西宮北口まで約1時間半ほど歩いて行きました。武庫川を電車が渡ると、大阪側は全く別世界の様に平然とありました。梅田で、先ず親戚、知り合い、勤務先などに電話をし、それから食品を中心に必需品を購入し、銭湯が無いのでサウナに行きました。家に帰り、家族に「大阪は平常通りなので、交代で大阪に風呂に入り美味しいものを食べに行こう、そしてゆっくり神戸の回復を待とう。」と話し合いました。

以上全く思いも及ばず準備のない状態で、太平洋戦争以後最大の災害に遭遇したことを思いだし書きました。また日頃から考えておいた方がよいと思う事を、次に列挙します。

1. 日頃の近所付き合いは最も大切、マンションでは特に大切。(マンションでは隣近所の付き合いは要らないとよく言われますが、これは大きな間違い！)

2. 電気器具、水道、ガス、配水管システムの仕組みを日頃から充分理解しておくこと。出来れば簡単な応急修理は、自分で出来るようにすること。(日頃快適な生活をするため、電気温水器のように電気器具はマイコンで制御し相当複雑高級化しています。これらのものは、一旦故障すると大変危険な状態になる場合があることを充分認識する必要がある。)

3. トイレなどの生活用水としての小川の水、緊急避難場所として神社の緑は非常に大切です。日頃から、2500分の1神戸市都市計画基本図や国土地理院の一万分の一地図(どちらもジュンク堂で買えます)で散歩がてらによく調べる事。そして水と緑を、日頃から大切にしよう心がけること。

4. 震災後狭い生活道路に一般車が入り込み、非常に歩き難かった。震災時は歩行が基本ですから、一般車の生活道路乗り入れを全面禁止する。

5. 地震で六甲山は、相当痛められています。阪神大水害を思い起こし、砂防の重要性をもっと認識すること。

(追伸)

いま小川卓海助役の悲報に接しました。

区画整理事業は、システムとして何か大きな問題が有るのではないのでしょうか？

小川助役は非常に優秀な行政マンです。この小川助役が乗り越えられなかったことは、区画整理事業の仕組みそのものに大きな欠陥があるはずです。

現在進行中の森南町などの区画整理事業そのものをどうすると言うことではなく、都市計画という大きなシステムの枠組みの中で、区画整理事業を勉強する必要があると思います。これはマンションにも言えます。被災マンションも、再建と言う大きな問題に躓いています。この問題を市民の立場から、国の行政に向かって勉強を行いたい。

「阪神大震災」給水記録

北畑保久良台自治会

会長 千葉春海

生まれてこの方の激しい地震衝撃に崖上にあった鉄筋コンクリートの我が家が崖を滑り落ちたと思った。悲壮な思いで外に出て懐中電灯で点検すると全く異常が無い。「良かった!」と、ここで始めて扉がすぐ開いて外に出られたことに思い当たった。しかし薄明のなかで妙に「しん」と静まっている。家はどこも倒れていないが皆衝撃で凝然としているらしい。大声で近隣の安全を確かめるとやった各々「大丈夫です」と答えが返ってきた。この保久良山腹にある23戸はガスはプロパンであり、元栓を締めるよう声を掛ける。またここは市の水道が来ていないので生命線である井戸揚水ポンプ、濾過施設、高置水槽を急いで調べると停電で運転出来ないが異常はなさそうである。そこで「井戸ポンプは大丈夫です、停電で揚水出来ないので飲料以外の水は使わないように」と伝えて回った。あとで判ったことだが、このとき保久良神社の絵馬堂が倒壊し、6人中4人が下敷きになり2人は下山したらしいが、下山路の途中にある我々には遠慮か、動転したのか連絡がなかった。即死かもしれないが、あれば4日間も下敷きのまま放置することはなかった。

携帯ラジオは震源淡路、神戸の震度5とか6を報じており、建築士である私の知識では従来の仙台地震等と比べ大きいと思えない価値である。明るくなり、6時頃一時的に電気も回復し幸い井戸ポンプの運転も可能だった。またTVにより高速道路の倒壊を見て驚き、保久良参道から確認もしたが震度6ではあり得ないことであり、気象庁が誤った震度を発表するとは考えられなかったので欠陥コンクリート工事であろうと思った。以後20時過ぎ

まで再び停電し、TV情報もポンプ揚水も電気掃除機もだめになった。

山上の我が家の窓から東灘の街を見下ろすと、阪急線より上の住宅は何事もなく見え、JR線ぞいの中層ビルも所々明白に傾いているものもあるが、多くは何となく歪んでいるように見えてもよく判らない。後で殆どの建物が1階が崩壊していたことが判った。被害のひどかったJR線以南の木造住宅は中層ビルの陰で見えなかったわけである。深江で火災が発生したが消防活動の様子もない。西から黒雲が覆ってきたが火災の煙かどうか判明しない。車で大阪へ行こうとした人が通行不能で返ってくる。こうして早い17日が暮れた。

18日、TVで被害、道路の麻痺などが判ってきた。本山第一小学校の千人以上の避難者が食料も水もないことが住民のM氏の子息の医者から連絡があり、M氏が救援依頼をためらう校長に保久良台自治会あての援助依頼書を書かせてきた。18日朝は乾パン、昼は食パン1切れ、今夜の食事が無いとのこと。我々は幸い電気さえあれば井戸水もあり、各戸の協力で電気炊飯器でおにぎり1161個を作って貰い餅箱に並べ、今は貴重になったプロパンガスで沸かした熱いお茶も20ℓポリタンク2個に入れて小路青年団の小型トラックで小路老人の家と本山第1小に届けた。既に狭い水道筋は避難車両で動きがとれない状態であった。校長の話では援助食料は西宮まで来ているとのことであった。

翌19日、井戸ポンプで給水可能と聞いて、朝から青年団がトラックとバケツで保久良台に水を取りに来るが急坂で運搬途中で大半はこぼれてしまう。ポンプ濾過剤入れの60ℓ大型蓋付きポリバケツ4個を提供し、ポリ袋をかぶせガムテープ巻きでこぼれを防ぐ。

行ってみると小学校では人々が容器をもって長時間並んで水を待っている。「すぐまた持ってきます」とピストン運行する。これは給水車が順調に来るようになるまで1週間続

阪神大震災の体験

東部マンション自治会

理事長 網家弘一

いた。井戸ポンプの緊急時の有用性を遺憾なく示したと言える。グリーンハイツや本山5丁目にも「水あります」と連絡したので個人で水を取りに来る人も多かった。青年団の水運搬トラックを追ってきたと言う人もあり、住民中より「多人数で水を取りに押しかけられたらどうする」との発言もあった。この方は水道の復旧まで10日余り給水した。

一方19日にも救援食料は来ず、避難者は臨海ガスタンクの爆発危険からの避難を含み2000人に増え夕食に2000個のおにぎりが必要となり、朝から昨日同様各戸でおにぎりを作ると共に、拙宅では娘と家内、ボランティアの女性含め6人で居間の大テーブルで16時過ぎまで掛かって計2026個を握り上げた。それからやっと家内と二人で国道2号線まで状況を見に下りて始めて物凄い震災被害を見たのである。赤い落日の下破碎され尽くした建物の暗い街路を緊急車両のライトに照らされながら疲れ果てて黙々と東へ歩む避難民の列の黙示録的光景は忘れることはないであろう。

百回も電話し、やっと通じたと言う東京の息子に連絡させ20時頃東京の読売新聞編集部から電話が掛かる。私は「援助は西宮までだ、東灘の本山第一小では千人以上に3日間援助は全くない。道路麻痺は当然だ。何故自衛隊のヘリで校庭に輸送できないのか、一体どうしているのか」と訴えた。22時頃の読売TVが「神戸の救援活動がうまく行っていない」と本山第三小の状況を報道しだした。

私は阪神高速道路倒壊地区より1キロ南の深江浜町第四工区神戸東部中央卸売市場内、5階建て地下は醗酵室一階は倉庫になっているマンションに住んでおります。

平成7年1月17日午前5時46分、いつものように洗面を終わり、鏡の前に立っておりました。その時何とも言えない大音響と共に天井に突きあげられまた下にたたきつけられ一瞬このまま死んでしまうのか？その後横揺れ、あ！地震だと初めて気が付く。家具が倒れ、食器類が壊れ足の踏み場もない。妻に「大丈夫か、布団に潜れ」、妻は「スリッパを履かないと危ない」と叫ぶ、それどころではない。やっとの思いで窓から外を見ると暗闇の中、自動車が数台停車。そのライトで、水が湧き上がり道路のいたる所から噴水のように水が噴き上がるのが見える。あー海水が埋め立て地が海の中へー大変なことになったと思っていると、自動車の車輪の中程で止まり、水が引きかけた。後でこれが液状化とわかる。

各戸の玄関を叩き、大丈夫ですか、ガスを消し、安全な所に出て下さいと叫ぶ。そして屋外に出ようとしてまたびっくり。マンションの周囲が約1m沈下し、ガス管、水道、汚水管等がひきちぎられ地面は泥沼。東の空が白みかける、北の方面で数箇所煙が見える。段々と被害の大きさがわかる。慌てて店舗の方へ行く、卸売市場のため、多数の方々が夜中より仕事中、これまでに経験のない大地震、いたる所に人々が集まり、これから又何が起るのかと恐怖と驚きが入りみだれ騒然としている。

買い出し人が一人来る。阪神高速道路の倒壊の43号線の西行の信号で停車中に地震に遭

い、命からがらやっとの思いで中央市場にたどり着き、体は小刻みに震え声を詰まらせながら「高速が倒れ、家がみんな潰れている」と叫ぶ。居合わせた人々は「お前、何を言うとするんや。地震で頭がおかしくなったんやないか。高速が倒れるなんてそんな馬鹿な」と信じない。

だがその人は恐怖と驚きで、同じことを震えながら何回も叫ぶ。

その後市経済局市場課に行く。場長以下数人待機していましたが、突然の出来事で、なすすべもなく、ただ茫然としている。早速場内の業者より食料、水ボトルを救援物資として提供があり、トラックで区役所まで運ぶ。43号線上で愕然とする。区役所までの家屋の倒壊の烈しさ悲惨さに涙が出てくる。

区役所には人々が多数集まっており、水ボトル、牛乳、パン等が置かれている。(初日は皆、静かに係員の指示に従うが、2日目より頂く人々も皆、殺気立って恐かった。) 救援物資を下ろし、物資を積み直し、東灘区内の避難所へ配達の依頼を受け、係の方と3台で出発。しかし、車は前に進まない。仕方なく対向車線をトラックの前で蛍光棒を振って走る。対向車は早急によけてくれる。通常の道を追い越して行くより早く安全。しかし平常では絶対してはいけないことだが、一刻も早く避難所へと心がはやり、緊急の場合でしたので仕方が有りませんでした。区役所の帰りには当マンション136戸分の救援物資を頂き、各戸に分配をしました。

その後、担当地区内の1人暮らしの高齢者そして仲間の民生委員の確認をし、あたりが暗くなって来たのでどちらへ避難をしようかと思っていたところパッと電気がついてほっとしました。早速テレビのニュースを見て少しは気持ちが落ち着く。このようにして17日が終わりました。

その後23日まで区役所、避難所、マンションへと物資を運び、分配をしました。その後

は2ヶ月間、当地区の県立東灘高等学校に大変お世話になりました。ショックで人々は不安に陥り、ただおどおどするばかりの時、校長先生教頭先生また職員の方々には、学校またご自宅の被害にもかかわらず、交通の不便な中私共に沈着丁寧に対応され適切な生活必需品を救援本部に連絡を取り、私達を助けて頂きました。また2ヶ月間朝夕のお弁当もお世話になり、長い間ご苦勞をお掛け致しました。居住者一同心より感謝致しております。

当マンションはお陰様で死亡者はなく、怪我人は骨折5名、住宅の被害は半壊ですみました。各関係者のご努力により、3月17日、ライフラインが復旧し、平常に戻りました。

今回の大震災の体験と致しまして、

① 各地区の自治会がきちんと運営され、またリーダーが適確な情報を集め、皆を引っ張っていける人、またリーダーをサポートできる人々が必要だと痛感致しました。当マンションは中央市場内に住居と仕事場があり、トラック、フォークリフト等々があり通常の集合マンションと違い非常にやりやすかったと思います。

② 普通は当たり前のような文化生活も一つ間ち違えばこれほど困ることはない。ガス、電気、水道、汚水処理等々、特に水が一番必要であり、前に書きましたように当マンションの地下の醗酵室に地下水が溜まってましたので、居住者全員でバケツリレーで各戸の湯槽に溜め、どんどん便器に流してもらいました。沈下で汚水管が切断されていましたが皆で仮につなぎ難を免れました。

③ 大災害の後、気持ちが荒んでいる時、某水道局の十数人の方々が1月の末の寒い日にカス汁、ぜんざいの炊き出しをしてくれました。労働組合の方々に感謝しております。非常の場合は皆で炊き出しをし、食べながら話をするのが団結もできて良いことだと思います。

④ 一番腹が立ったことは震災直後他府県の単車が十数台グループになり、中には後の席

阪神・淡路大震災の追憶

深江南カネボウアーバン自治会

会長 谷本 博

に女性を乗せ渋滞している車道を走り、倒壊された家屋の前でVサインで記念写真。なんという不謹慎だろうかと思いましたが憤慨しました。

⑤ 一番気の毒だった方、区役所より1月20日頃でしたが午前4時に区役所へ来てほしいとボランティアの要請がありました。居住者の方が快く奥様と同伴で出てくれました。大阪までドライアイスを取りに行き神戸に帰ったところ、各霊安所に運ぶように言われました。霊安所では人手が少なく、毛布にくるまっている死亡者の方の下に入れて下さいとのことで、未だ経験のないことで、気の毒に思う気持ちに加え悲しいのと恐ろしさで体が震え涙が出てどうしようもなかったそうです。本当に一生忘れることのできない経験をされました。

⑥ 最後に心温まる話!! 10トン車の水槽車で韓国、下関、神戸、大阪、京都、東京へ鮮魚の輸送をする会社の社長が会社も本人も被災し社員からも死亡者を出しましたが、今何をすれば長く住む神戸に恩返しができるかと考え、水が必要なのだと気づき、各都市の水産の荷受会社に頼み無料で提供してもらい、病院や各町内会、当マンションにも長期間運んでくれました。社長の機転で助かりました。人の温かさを感じ、大変有難く思いました。

⑦ 個人的に嬉しかったこと。大阪市旭区に住む同級生が18日、阪神甲子園駅から深江まで二時間も歩き重いリュックを肩にこい込ませ両手に荷物を持って安否確認に来てくれました。また遠方の知人、友人より救援物資を送って戴きこの非常時に温かい心にふれ大変嬉しく感謝致しました。

阪神大震災より早一年余りが過ぎようとしております。当地区も瓦礫の積み出し港になっていましたが今は終了致しました。然しマンションの周囲は1月17日の沈下のままです。

神戸っ子のバイタリティがある限り、以前より美しい立派な街になり、国内の方々はもとより世界に誇れる都市に復興することを願っております。

終。

幾多の地震の体験はありますが、今回の阪神、淡路大震災は始めてであり、その当時は忠実にふりかえるのも、今後の地震対策の参考になりはしないかと考へます。

当カネボウアーバン自治会は260世帯、約1,000名の居住者が生活しており、災害は、電気、ガス、水道、電話が完全にストップし、状況の情報もなく、夜明けを待って被害状況を調べると同時に、被害者が無いか確認した。

幸い骨折、硝子の破片による傷が4名で、内2名は各自所有の車で病院に運び処置した事で、ことなきを得た。情報をあつめる為、最寄りの、芦屋警察署、芦屋市役所におもむいたが、残念乍ら何も得るものがなかった。

午後より、自転車で緊急避難場所になっている東灘小学校に行く途中で頂度43号線上の高速道路が横倒しになっているので迂回しながら、着いてみると、グランドやその周辺は避難の人達で所せましとひしめいており、まだ市の職員もおらずテレビで見るアフリカの難民の状態を想ひださせる光景でした。こゝでは、何の状況判断も得られず、止むを得ず一時間程かけて東灘区役所に行ってみると、職員が二人で対応している様子で、とりつくしまもなく、周囲には、わずかな毛布とパンがあるのみでこゝに居てもどうしようもなく、冬の事とて陽のくれるのも早く、取急ぎ帰り、皆さんに呼びかけ、手許にある米、卵、ボトルの水、カセットコンロを提供してもらい、ローソクを頼りに、震災当日の夕食はしのぐ事が出来た。

翌日、再び区役所に行き、救援物資の援助をお願いしたが、当初は東灘小学校へ取りに行く様指示されたが、現状は陸の孤島と同じ

でとても小学校まで取りに行く事は不可能であり、職員は現状を充分把握していなくて、ただ避難所に取りに行けの一点張り。水に於いても同じ言葉がかえってくるばかりでした。しかしその時は住民の生命にかゝる問題であり、一時間近く交渉してやっと500食を定期的に配送してもらう事が約束でき、ほっとすると同時に、今度は水の問題で心配したが、幸い近所の株吉田組の会社が、大阪より良質の船舶用の水をタグボート3隻で、通水する2月28日迄、水を運んでいただけました。これは感謝だけではすまされないものがあります。2月10日過ぎより他府県の応援の給水車が朝昼晩と3回巡回する様にはなりましたが、ガスに至っては、3月14日まで、点火ができなかった。ガスが使える翌日に、長い間お世話になった救援物資も終了の連絡をさせていただきました。ここに他府県のボランティアや物資、神戸市の援助、本当にありがとうございます。

次にあまり報道されていないものに、教育問題があります。頂度三学期で、六年生は公私立の中学校に入る問題と、後で判ったのですが低学年の精神的な自立等の障害が問題になっている事を聞きましたが、その時は父兄の要望もあり、小学校に連絡し、当方は幸い勉強できる場所があり、机、椅子や座敷用机もあり、現在、百人程の生徒がそこで、学年別毎で勉強が出来る状況を説明し、先生を派遣していたゞく様要請したが、全生徒の指導に公平に出来ないと返事で、結局話がこちれてこちらからお断りしましたが、せっかくの父母や子供達の気持ちをくんで、神戸大学教養学部の教授に救援をお願いしたところ、出来る限りボランティアとして生徒に連絡していたゞける事の快諾を得た。(教育委員会には連絡済) 2月4日より早速当初6人の人達が、課外授業ということで指導にあたり、学校再開3月20日過ぎには20人の学生が子供達の指導に当たって下さいました。一、二年生の

子供は精神的なショックがあったのか、先生のような学生にまといつきそばで見ていると、無理しても学校の真似ごとでも早くしてよかったと思います。

今迄申述べましたが何か取入れられるものがあれば活用していたゞければ幸いです。

震災活動体験

深江南町2丁目自治会

会 計 岡 田 教 義

悪夢のような震災から1年半が過ぎようとしています。空き地にも少しずつ新しい家屋が建ち始めたり、阪神高速道路もこの9月30日には、全線開通する予定で突貫工事が行われており、町並みも一日一日姿を変えて震災の傷痕が少なくなり、町内の住民の方達も活気が感じられるようになってきました。

しかし、町並みの震災の傷痕は少なくなっても、人々の心の傷痕はなかなか消えることはならないのではないのでしょうか。わたしも大きな音や、道路工事に使用される大型機械が通行する時の振動に、あの時の恐怖感が蘇ることが時々ありますが、また震災後の体験は、貴重な体験を得ました。

さて、私たちの町内では、震災の翌日の朝に3丁目の見附住宅で救援物資の配給があるとの情報が流れて、住民の方達が集まり救援物資を受け取りましたが、夕方の救援物資の配給には朝よりも住民の方達が多数集まりすぎて、救援物資が不足し、見附住宅の住民の方と他の住民の間で救援物資配分でトラブルが発生しましたが、見附住宅の住民の代表と他の住民の代表の間で救援物資の増加、配分の仕方等の話し合いを行い、早速2丁目を3ブロックに区分し、各ブロックで担当者と手伝いできる方を選出し、翌日より実施しましたが、初めての方達ばかりなのでルールもやり方もわからず、とりあえず役割分担を決めて運営をいたしました。配給方法は配給個数の少ない物品については申告制にして、それでも不足する場合は、抽選で配給実施し、衣服等はサイズや好みがあるために住民の方が各自に選んで行く方法を取り、また食品関係は家族構成によって配給個数を決め、トラブ

ルが発生した時はその都度ブロック内で相談し合って解決し、運営をいたしました。また、運営途中より青木中央公園のボランティアより炊き出し配給の申し出があり、ありがたく受けたり、近くの医師からも必需品の提供やコープこうべや付近のお商売をされてる方からも食料品の提供があり、多いに住民の方より喜ばれました。

救援物資の配給運営途中から住民の方より自治会へ倒壊家屋へ不審者の出入りがあるとの通報も2～3件あり、幸いにそれまで火災もなかったので各ブロック内で自衛団を結成し、夜回り等を実施いたしましたところ、その後火災も不審者の出入りの通報も無くそれなりの成果が出せたと思われま

す。救援物資の配給運営も夜回り実施も、町内全域に水道復旧がされた2月末日で住民の方の同意をもって終了いたしました。

その後の自治会運営においては、震災で亡くなられた方達への供養や本年度の町内会費の徴収中止を理事会で決定し、行政からの情報告知などを行いました。

今回の震災で非常時の自治会運営の難しさをいろいろと浮き彫りにしましたが、隣人の方達の思いやりも同時に感じられた方も多いことでしょう。自治会運営も本来は思いやりの集合体でなければならないと思います。それには住民の方達との対話が必要と思われま

すので、今後の自治会運営については、副会長の2名制を早速導入し、理事役員の交替制や理事役員と住民との情報交換やまた、理事会の開催回数を増などを実施し、住民の方達とのより密なコミュニケーションができるよう努力するようにしなければならないと思います。

最後に救援物資の配給運営や夜回り実施に従事していただいた方達や他府県からのボランティアの方達、いろいろと物資の提供いただいた方達に多いに感謝したいです。

以上

私と阪神大震災

深江南町4丁目自治会

会長 藤原久次

「地震、地震」と妻が叫んでいる。畳ごと持ち上げられ下に落とされた、ぐらぐらとゆれている時間が長い、フトンの上に本箱（高さ180cm）が倒れてくるのが見えるのにどうにも動けない、天井から吊り下がっている電気笠も落下してきた。ようやく寝床よりはいだした、パジャマの左足に血がついている、脱いでみると薄紫色にはれている、服に着がえた、懐中電灯の明かりで妻を見た、妻は整理タンスにもたれている、「もし、寝ていれば顔の上に物が落ちてきて怪我でもしていたかも、地震1分前に目がさめ、トイレにいこうとガウンを羽織った時に、ぐらぐらと大揺れした、動こうにも動けない」懐中電灯であたりを照らす、洋服タンス、整理タンスの上ののせていた物はみな畳の上に落ちている、カックウ時計がフスマを破っている、隣の部屋を覗く、仏壇、和タンスが南側に倒れヤグラコタツに掛けてあるフトンの上は、灰と水（花筒）でどろどろ、小型テレビも転がっている。居間に行けば大型テレビ、電話機、書類棚も倒れていて、足の踏み場もない。台所では、冷蔵庫、食器棚が倒れ、テーブルに乗っかかっている、ガラス製品は目茶苦茶に割れている。西側の壁に沿って置いてあるタンスは20cm程北に移動しているが、東側、南側、北側に置いてある物はほとんど倒れている。

夜が明けてきて外へ出て驚いた。東側の3軒が北のマンションにもたれている。南側は東の家の2階の一部がのっかかっている。西側は2階の屋根の瓦が飛んでいる。2階建ての家が2つにさけて道路にはみだしている。家に帰り台所を片付ける、ビニール袋に割れガラスが4袋、部屋も元のように戻して、座

る場所をこしらえた。便所に使う水は井戸水でよいが、飲む水がない。口こみでサティの北に水道管が破裂して吹き出ている場所を聞き、ボトルを持って大日43号線交差点にきて驚いた、阪神高速3号線がない、北に傾いている。道路は凸凹で歩きにくい、目的地に着くと行列ができていて、ボトルに飲料水をつめて帰路に着く、傾いている家の多いのに驚きだ、日が暮れてきてローソクを電気コタツの上に置き、石油ストーブで湯を沸かす、外で誰かの声がある、息子と孫が灘区摩耶より安否を気遣い来てくれた、正午にマンションを自動車で行ったのに行詰り、行詰りで車が走れない、息子の話では阪神高速3号線が北に倒壊しているニュースを知り43号線沿道の親父は家の下敷きになっていると思ったらしい、妻と孫が抱きあって泣きながら無事を喜んでいた。

翌18日 山鳥サン（自治会会計）が訪ねてこられ「会長サン、大変な事になっています、家屋の倒壊と死亡者がでています」を聞き、メモを手にもたれて4丁目内を歩く。（昨日は自分の家の片付けで町内を見廻る事ができず）人が10人程集まっている輪の中に、入っては無事を確認し、行き先の分からない人をチェックしながら調べました。文化住宅の倒壊で、埋もれている人を知るも、どうする事もできない。倒壊家屋180棟、13名の遺体（深江南老人いこいの家に安置）午前11時30分頃、磯島公園でパンの配給をいただく。16時30分オニギリの配給があった。

19日 東灘小学校で9時頃パン、オニギリの配給をいただく。

日暮れ頃、所沢より救援消防隊が見えられた。家屋の倒壊で行先不明者を聞かれ、昨日メモした箇所の搜索をお願いした、自家発電機であたりを照らし、がれきのやまを掘り起こし捜していただく、残念ながら松岡とし子サン（カネ忠住宅）が遺体で21時に、21時30分には橋本義弘サン（中山荘）が遺体で、残

りの搜索は明日ということになり、お礼を言って別れた。

20日 見付住宅の方（3丁目）森口サン（2丁目）8時過ぎ見えられ、住民に物資の配給をすることになり、磯島公園を拠点にして、始めました。幸い協力者が現われ山鳥サン、富永夫婦を始め学生3人、その他住民各位の協力をお願いしました。地域の皆さんもたいへん喜んでくださいました。電気が点灯。

21日～23日 物資の受領と配給を磯島公園で（350人）。

水城務さん（中山荘）、須田実秋サン、石井貞夫サン（カネ忠住宅）遺体でご冥福を祈ります。

24日 深江地区連合自治会より東灘小学校に集合のお知らせがあったが、参加した自治会長は7名だけで、竹田副会長より激励の言葉。

25日 本庄小学校で自衛隊の風呂ができた。

26日 磯島公園で広島大学のタキダシ始まる（31日まで）。

28日 筒井県議タキダシあり。

2月3日 赤穂より客船（シンホニー号）深江浜に接岸し、風呂、食事（有料）。

6日 愛知県よりボランティアが磯島公園でタキダシ始まる（9日まで）。

22日 福井県よりボランティアが磯島公園でタキダシ始まる（28日まで）。

24日 長野県穂高町役場より救援物資あり。

28日 救援物資の配給（南町4丁目）終了。

3月1日～26日 避難者に配給（15名）。

3月5日 水道が復旧。

3月20日 ガスが復旧。

まとめ

日本中で一番気候風土の最高である神戸に突然襲った大激震は有史以来最大級でありました。私達神戸に住む人間はあんな大きな地震は夢にも想像せず被害の前に無力の姿をさらし只右往左往するのみでありました。2日たち3日たちするうち水と食料を求める声が

大になり1月20日より磯島公園を拠点とし住民の皆さんに物資の配給をすることになりました。被害後4～5日して井戸水が枯れ、朝起きては深江の浜に水を求め9時頃の電話で物資の受領、配給。午後はまた水を求め16時頃の電話で物資の受領、配給で只ボーとして暮らす日々でした。

神戸市（災害救助委員）深江地区連合自治会（単一自治会で加盟）からも何の指示もなく、任務遂行ができませんでした。今後の教訓として地区自治体は災害救助委員の任務遂行ができる体制をとれるようにすることが望まれます。

災害から1ヶ月がたった時親戚より差入れのありました関東炊き、少々同じおかずの弁当で見るのもうんざりしてしまいましたので、近所にもおわけし食べた嬉しさは忘れられません。広島大学、愛知県、福井県のボランティアのタキダシも寒い時期でしたので大変おいしくいただきました。

水道、ガスの復活により人間らしい生活ができるようになり、落ち着きがみえはじめました。消防、自衛隊、ボランティアの皆様には大変お世話になりました。

神戸市災害救助委員も独りではなにもできません、東灘区役所にいきましても大勢の人で連絡もとれず大震災の威力が凄かったと思うだけです。

繁栄自治会

会長 佐野末夫

連休明けで、仕入に行くため起きようとした時です。1月17日午前5時46分不気味な地鳴りと、それに続くドンドンと上下の揺れ、グラグラグラと左右の揺れ、頭からふとんを被り、物の落ちる音を聞いた。本当に永い時間だったと思っていた（それがたったの20秒）家内は、朝食の準備のために一階に降りた時で、声を掛け合い無事を確かめながら、揺れがおさまるのを待って、直ぐに一階に降り、服を着ながら「屋根瓦が落ちているので外には出るな」と話し合っている時に、外で「火事や」「消火器はないか」と騒ぎかけたので、とりあえず一度外に出て見なければならぬと思い、玄関のドアを開けて外に出てみると、火柱が上がっており消火器を渡しても追いつかない状態だった。

119に電話を掛けるのに、家に入り電話機を探したが見当たらず、公衆電話にと外へ走ったが、これも駄目、単車で走っていた、若者に「すまんが消防署まで走ってくれないか」と頼むと、快く引受けてくれたので安心して火の方を向くと、自分の家の方に迫ってきており、ついに、自然鎮火するまでに消防自動車のサイレンを聞くことも出来なかった。

その間、近所の一階が全壊しその家の奥さんを、狭い間から、救い出すなど、近所の人々と声をかけ合いながらの時間は、あっと言う間のように思え、家も焼け落ち、やっと鎮火してから、市場の店まで行く間の風景は、生き地獄の感がした。

店（深江ショッピングセンター）も全壊で、手のつけようもなく、取り急ぎ東灘区役所まで、現状の報告に行くべきだと気がつき、自転車で区長に報告した事は記憶にあるが、ど

こをどのように自転車で走ったかなどの記憶は薄い。

その後、お昼頃だと思うが、東灘小学校に行ったところ、校庭は避難者で一杯で、思い思いに固まっており、なんら統制も取れず、只立ち尽くす人びとで、どうすることも出来ずであったので、学校とも話をして、教室内をかたづけることとなったが、これもまた、水槽の水が教室内をびしょびしょにしており、其の掃除からはじめ夕方近くまでかかったように思う。その間にも、第4工区のディリークック株の島田工場長より、「震災で出荷が出来ない、2000食のべんとうが有るので、取りにきてくれるなら」との連絡をうけて、市場の人達に、手伝ってもらい、車を提供してもらうなど、苦勞を重ねて学校に運んでもらうことが出来、一家族に1個でしんぼうするなど、皆で分け合った事も思い出のひとつになった。

又一方では、怪我人や死体の運び込みも続き、教室を開けるなどや、灘交通株の、救急車をお願いし甲南病院への搬送は、85名にもなった。

夜9時頃になると、何とか、みんなは静まりはじめたが、学校周辺の交通は、停滞状態となり、交通整理に出たところ、各地で電柱などの倒壊のため、道路の通行が不能な場所の情報も無く、何度か怒鳴られた事もあった。それにしてもこの日の冷え込みには、まいった、いまでも、あの時のしびれた足の感覚が思い出される。

深江地区及び東灘小学校 被災者人数

平成7年1月23日現在

| | | | | |
|------------|-----|---------|--------------|---------|
| 東灘小学校 | 南校舎 | 780 名 | 深江北町3 (かんばや) | 50 名 |
| | 北校舎 | 243 名 | 稲荷自治会 (小松原) | 145 名 |
| | 校庭 | 211 名 | 稲荷自治会 (本庄公園) | 120 名 |
| | 小計 | 1,234 名 | 本庄鉄筋住宅 | 59 名 |
| 本庄地域福祉センター | | 170 名 | 相互タクシー社宅 | 99 名 |
| 深江会館 | | 120 名 | 郵政寮 | 75 名 |
| 竹中さくら会館 | | 47 名 | ファミリー1番館 | 155 名 |
| 深江幼稚園 | | 50 名 | ファミリー東灘 | 120 名 |
| 深江南住宅 | | 100 名 | 深江北住宅 | 153 名 |
| 深江本町集会所 | | 20 名 | 川西住宅 | 43 名 |
| 深江南地区 (鎌田) | | 50 名 | 札幌市住 | 60 名 |
| 深江本町1 (鈴木) | | 30 名 | 栄公園 | 175 名 |
| 稲荷温泉の上 | | 30 名 | 深江本町3丁目 | 120 名 |
| メゾン・ソーレ | | 26 名 | 日商岩井マンション | 50 名 |
| 東灘サンハイツ | | 67 名 | 武道館 | 21 名 |
| 小計 | | 710 名 | 東灘コーポラス | 42 名 |
| | | | 小計 | 1,487 名 |

合計 3,431 名

以上の食事準備及び給水等の配布を行った。

- 1/18 兵庫県朝来郡山東町諏訪より、救援物資が到着。おにぎり1,500個他。
- 1/19 学校に安置した遺体 23名。
兵庫県朝来郡山東町より、救援物資が到着。おにぎり・水・おしめ・ミルク他。
- 1/20 救援物資・多数到着した。水が不足している。
- 21 岡山市よりの「肉だんご汁」の炊き出し 2,000 食分。
802 ラジオを聞き、1,200 名が物資を持って来校、救急車・給水車の、入校できなくなり、迷惑であった。
- 22 鳥取県より、かにめし・だんご汁・塩さばなどの救援。
京都府夜久野町より救援物資が届く。
味噌汁の差し入れ 1,300 食。
- 23 遺体2体が教室に残る。

震災直後の青木地区の対応

青木連合自治会

会長 貝谷 央

震災当日、青木二丁目自治会副会長に万事を依頼して、連合自治会事務所である青木文化センターに出向いたのは午後の事である。

既に被災者が押しかけ1・2・3階共に満員で夜になると約400人の被災者で立錫の余地もない状態だった。

当日はアサヒ屋からの好意で学校給食用のパンを頂き何とか切抜けた。

翌日はパン60個にボトル2本の飲料水でも被災者全員に分配出来ないの、70歳以上の老人と満5歳迄の小児に、パン1個と水1杯の分配で済ませた。年寄りが、パン1切れか水1杯で良いからと手を合わせてこられたがどうする事も出来なかった。

白野館長と相談の上、青木地域の臨時避難所の所在地と人員、それに責任者・世話人を把握をする為に、名簿用紙を作成し、氏名・年齢・性別・住所を記入の上報告方を依頼した。各単位自治会長（不在の時は責任者を選定）には自治会区域内に居住する自治会員・外来者・外国籍を問わず、人員を把握し、援護物資授受の場所の報告を願い、同時に人員の増減については絶えず連絡方を依頼した。

東灘消防団本庄青木分団には消防活動以外の待機時には臨時避難所本部の応援を依頼した。同時に青木文化センターを『青木地区臨時避難所統括本部』とし、16単位自治会（西青木連合自治会の一部を編入）と5箇所の臨時避難所と消防団を入れて計5500人分の援護物資の獲得と公平な配分に取り組んだ。本庄中央公園は当初1000人からの被災者で大世帯になっていたの、派閥があり責任者が仲々決まらず別個の行動を取っていた。私は話し合いに行き地域責任者の有無について吊しあげにあっ

たが種々話し合いの上、やっと臨時避難所統括本部の傘下に編入することが出来た。

震災当日から私と白野館長とは4日4晩徹夜で救援物資の收受と配分・緊急電話や被災者の対応で時を過ごしたが、翌日からは各自治会長に2名以上の宿直員の派遣を依頼した。夜は9時に引き継ぎ朝は6時迄に出て行く事にした。この制度も2月18日には終焉にした。以後は被災者有志の方からの宿直の申し出があり厚意に甘えた。

臨時避難所統括本部の件は市・区災害対策本部に経緯を説明の上、以後絶えず人員の増減及びその他の事項についても連携を保ったので援護物資の配給は円滑に処理する事ができた。

援護物資の授受については、震災当初は災害対策本部又は外部からの直送分も含め徹夜で受取り直ぐに配分し配送を続けて居たが、少し落ち着いてからは夜間の分は朝6時半に配送、昼間の分はその都度配送をすることにした。尚後半には朝6時半頃1回、午後4時頃に1回と日に2回に統一した。

輸送機関は被災者及び自治会役員所有の小型トラックと台車等を利用した。傘下22ヶ所への配分は連合自治会長が品名別に配分表を2部作成（送り状・受領書）して配送者に手渡し、誤配に留意した。

輸送形態は三形態にした。

- ① 臨時避難所本部からの輸送
- ② 避難所、自治会からの直接の受領
- ③ 北青木地区の県・市営住宅自治会は協議のうえ一拠点に一括配送し、そこから各自治会が受領

当本部は消防団の二十四時間の勤務態勢のお陰で、ボランティア活動の申し出は一切お断りする事が出来た。

医療機関については、巡回医療班の回診の外に、住吉クリニック院長の応援を得ていたが、当本部近在の瀧口クリニック院長（箕谷居住）に電話で開院方の依頼をして早々に開

震災直後の青木2丁目の対応

青木2丁目自治会

会長 貝谷 央

二丁目自治会の編成は三十班の班長を掌握するのに地域を「西地区」「中地区」「東地区」と三分割し、これを各地区の総班長が統率している。

会長・副会長からの伝達及び回覧等、または自治会員からの申し出事項は総てこの編成に基づき上意・下達がスムーズにながれている。

震災で私の住居は幸いにも一部の損壊ですみました。当日、私はベットの上とベット周辺が震災に因る崩落物とガラス破片が散乱していたので、足元が見える夜明けを待ち息子夫婦にその除去と後始末して貰ってから、起き上がり行動を起こしました。

外に出ると、当地区は四割程度の家屋が倒壊、道路は塞がれ通行も困難で見渡す限り凄惨な状態でありました。

私宅にも全壊したアパートの被災者の10人が避難してきて同居生活が始まり、最終の一世帯は7月2日に出ていきました。私は事態の深刻さに目を瞠りながら、兎に角食料の獲得に走り、学校給食用のパンをアサヒ屋から頂き自治会員に配分しかけたが、取り合いでも満足できる数量でなく、然も一時的なもので何とか方策を考える必要がありました。

神戸市災害救助協力委員の肩書を持つ二人の自治会役員は、「私達は何をしたらよいのやろ」と言いながらも溝のガス管のガス漏れの手当や、道路に散乱している障害物の取り除き等、自分の手のつけられる程度の事から行動をしていました。私は自宅の南と北のアパートに生き埋めになっている人の救出を、警邏中の警察官や通行中の消防団員それに近

院して頂いた。開院時には崩落物の整理整頓等は本部避難所の被災者の応援を得た。

瀧口クリニック開院以来は傘下の被災者は両クリニックを利用する事が出来、その便利さに喜んでいた。

連絡事項については、区災害対策本部は勿論、駐在所、病院にも毎日連絡を取り合っていたので何事も円滑にはこんだ。

外部からの援護物資の直送については、1月19日午前一時に高野町長が輸送を陣頭指揮で持込んで戴き、九州・東京その他各地からも貴重な救援物資の輸送を受けた。

救援の炊き出しについては、当本部近くには適当な場所がないので総て本庄中央公園でお願いしていたが、2月末頃から近くの焼地跡の使用許可を得て炊き出しを受ける事にした。特に遠方のボランティアは群馬県笠懸町から入浴サービスを始め各地から豚汁・焼きそば等のサービスを受けた。

被災者の救援物資の配分状況については震災当時は5500人分から始まり1月末は4500人分で、2月16日からは実際に救援物資を必要とする方みの補給にしたので2月末には600人分と減少した。3月1日からは店舗やスーパーの営業復活で自活できる状態になったので物資の補給は避難所のみにした。

同時に『青木地区臨時避難所統括本部』は解体し、消防団も本業に立ち返った。3月末には125人分と減少。4月末112人分、5月末95人分、6月末には68人分で、7月は余り増減がなく、8月12日は21人分で救援物資の補給は打ち切った。

特に印象に残った事柄は、震災当初度々の余震で被災者の中で、又大地震があるとの流言に付和雷同し大勢が避難所を出て行きかけた事が二度あり、御影地区のガスタンクのガス漏れ事故で爆発の恐れがあるとの流言蜚語で大勢の人が又避難しかけた事である。

この3回とも館長が各階で被災者を説得して取り留める事が出来た。 以上

所の人に依頼したが、この様なパニック状態では手を貸すこともしてくれず何の役にも立ちませんでした。

何か組織を利用して団体行動を起こさなければならぬと痛感しました。

私は青木二丁目自治会長だけでなく青木連合自治会長として青木地域の責任者でもあるので、その責務を果たす必要もあり、家の事は息子夫婦に依頼し、二丁目自治会の事は副会長に依頼する事にしました。

二丁目自治会は先ず、副会長に総班長を通じ担当地域に現在居住する住民（自治会員・外来者・外国籍員を問わず）の人数を把握して報告を願った。人員の増減についてはその都度報告をして頂き、特にアパート・会社・工場については別途に責任者を選定して地区の総班長が掌握し、副会長に報告、副会長は員数の増減を絶えず連合自治会長に報告する事をお願いし、私は連合自治会の事務所である青木文化センターに出向きました。その後は副会長を中心に救援物資の受領と公平な分配は、総班長が統率している班の責任者に手渡し班責任者は班員に平等に配給をすることにした。

二丁目の救援物資の受け渡し場所は、私宅所有の貸駐車場全部を提供した。

食糧及びそれ以外の僅少救援物資については実情に即した配給をするために、副会長・総班長は担当区域を日夜巡回して状況を把握していた。例えば当初の僅少な毛布の配給については自治会長・副会長・総班長が同伴で夜半に野宿先を訪問して優先的に必要枚数を分配した。

人員の増減が激しいので人員の掌握には特に留意してもらった。

二丁目の出来事で食料以外の総ての事柄（埋没者の救出・道路を閉鎖した家屋の撤去・倒壊寸前の家屋の撤去・震災死者の寝棺の調達その他一切）についても連合自治会長に申し出をして頂き、連合自治会長は青木全般

の出来事を把握して神戸市・東灘区災害対策本部それに本庄青木消防分団に連絡の上対処すること約した。

二丁目自治会は何事も終始スムーズに事を運ぶことが出来たので住民からは大いに感謝されました。この反動で二丁目地域内で、自治会設立を督促していた大きなマンションが自治会設立の必要性を殊のほか認識を深め、自治会設立の機運が高まって来ている事は事実であるが、マンモスマンションの為か震災から1年2ヶ月経過したが未だに設立完成の報告がないのが残念であります。

私の1月17日とわが街の復興

竹本町自治会

会長 伊藤 芳治

平成7年は私にとって会社生活（第2の人生）最後の年であり、また第3の人生（悠々自適の人生）の出発の年でもあります。

1月17日（火）の前日は14.15.16日の3連休で17日（火）からいよいよ普段の生活に戻ろうとしていました。

1 家財の下敷きになったが直撃は免れた

私はいつも6時の起床ですがあの日は5時30分に眼がさめ、寢床でその日の予定や仕事の段取りなどを考えながら冥想めいそうにふけておりました。

その時『ごおう！』と言う地鳴りと共に『どかーん！』と床下から突き上げられ体が、約20cmほど宙に浮いた感じがしました。

そのあとの、横揺れで真っ暗の中、ゆすぶられ『ぎゅーう』『ぎゅーう』と家のきしむ音がやまず『もう、あかん家が倒れる！』と思いました。横揺れがおさまるまで20数秒がとても長く感じられました。揺れがおさまると、私の上に洋服ダンスが倒れてきていましたが、幸い枕元の整理タンスのお陰で直撃を免れ、30cm程の隙間から自力で這い出し『早く外へ出んと危ない』と家族達を大声で呼び会い外へ連れだしました。

夜が明けると、だんだんと被害の状況が判ってきて、青木の町は約半分程の家が全壊または半壊し、凄まじい光景でした。

幸いなことに、私の家は倒壊から免れ、屋根を全部葺き替え、壁を補修し、やっと元のように住めるようになりました。

2 庭園で四季折々の花木を眺め楽しむ

5月3日、ブロック塀の修理を済ませ、庭園作りに取りかかりました。

この庭園は、私の第三の人生の出発記念に

作ろうと考えていたものです。

雪見灯籠を中心に四季折々の花木を楽しめる庭を計画しました。庭の縁取りには、石を並べ、盛り土を置いて高くし立体感を持たせ、縁取りの一部に水槽（餅臼）を使い、水を一杯入れて姫睡蓮を楽しむことにしました。また庭園の左右には2.5m程の紅白の花みずきを植え、春には庭一杯の花を楽しめるようにしました。

小さな庭園（12㎡）ではありますが、私の楽園、憩いの場となりました。庭園の前で座り込んで眺めていると時間の経つのも忘れる程です。

3 廃品回収で復興に一助

今年の自治会の活動として、5月より月1回廃品回収（新聞、雑誌、ダンボール、ボロ、アルミ缶）だけは復活する事にしました。

神戸市が提唱しているゴミの減量化に昨年まで我々の自治会は大いに貢献してきましたが、震災後もはたしてみんなが協力してくれるか心配しておりました。

ところが徐々に協力して呉れる人が増えて9月には全回収量が3,430kgと震災前の回収量に戻ることが出来ました。

神戸市ではゴミ1トンの処理手数料に約2万円掛かると言われているので、我々は9月分だけでも6万8千円分協力したことになります。

また、この他にも皆さんの協力しようと言う意識が広がれば、ゴミの出し方等のマナーも守られ、町が美しくなる波及効果が大きいのではないかと考えています。

平成7年10月16日
竹本町自治会

阪神大震災と青木の町の復旧・復興記録

(自宅の復旧・復興記録や災害見舞など)

| 月・日・曜 | 摘 要 | 自宅の復旧・復興記録 |
|----------|--|-------------|
| 1月17日(火) | 阪神大震災 震源地 淡路島北淡の北、明石海峡の海底 M7.2 震度7の激震 | |
| 19日(木) | 救援物資の配給開始 1/19ちんがら屋1/20～井上宅前 | |
| 20日(金) | 電力復旧 通電開始 まだ一部停電もあった | |
| 24日(火) | 三洋ビル(赤ちゃんビル)解体について自治会と団交 …補強工事をして解体することになった | |
| 26日(木) | 阪神電車 梅田から青木まで 運転開始 | |
| 28日(土) | 自衛隊医師による訪問診察 | |
| 2月1日(水) | 三洋ビル解体工事説明 大成建設宇城課長ほか | |
| 3日(金) | 幸福温泉 銭湯営業開始 2時間の時間待ち | |
| 6日(月) | 関西スーパー営業開始 | |
| 13日(月) | 阪神電車 梅田から御影まで 運転開始 | |
| 18日(土) | 救援物資 班活動配給制 1班住田 2班高橋 3班倉本 半壊以上 38世帯 121名 2/末まで | |
| 19日(日) | 水道復旧水圧が低いが給水が出来るようになった | |
| 26日(日) | 本庄仮設住宅 第1回入居者が入居 | |
| 3月13日(月) | ガス復旧 大部分の家庭のガスが復旧した | |
| 4月10日(月) | 三洋ビル解体工事完了 | |
| 4月23日(日) | 井上食品店開店 | |
| 5月27日(土) | 廃品回収 震災後 第1回 回収量2,740kg | 9月には3,430kg |
| 6月26日(月) | 阪神電車 全線開通 | |
| 7月3日(月) | 青木市場開店 | |
| 8月6日(日) | 殺虫剤散布 自治会掲示板取り付け | |
| 13日 | 神戸高速 全線開通 | |
| 備考 | 4/8 大丸(神戸)営業開始 4/16 そごう(神戸)営業開始 | |

古堂戸浪自治会

会長 塚本 貞夫

ドドーン、ドーン、ドドーン、次は立って
いれないぐらいの横ゆれに依り、一時は大型
トラックでも、家に飛び込んで来たのではと、
思いました。家族の安否を確認をして、裏側
の共同住宅、近隣の状況を確認したく、家を出て非常におどろきを感じました。家と云う家は倒壊しています。電柱も傾いています。近所の人達は着のみ着のまま、路上に出ています。履き物をすぐさま有るだけ用意をして渡しました。共同住宅の一階に埋まっていると云う声に走り、三家族（6人）を助け出し、消防活動をしていますので、自治会内部の連絡他は副会長にまかし、消防小屋から消防自動車を出し、青木市場が燃えている為、団員と一緒に消火活動に入りましたが、消火栓に接続したものの水は出ません。防火用水を開けますと水が貯まっていません。青木地区は海に近いのを思い出し、海から海水を引こうと話がまとまりました。だけど海水を使うと云う事は消防自動車を一台、だめにしてしまうのです。東灘消防署よりホースを借りるのに、私は自家用に団員を乗せ調達に走り、海へ持って行き延長さして継ないでいきますが、火はすごいスピードで燃え広がります。一昼夜をかけて消火に徹しました。次には倒壊家屋に依る人命救助に行き、私達の持っている道具を出し合い行動を起こしましたが、重量機械がない悲しさを痛感しました。命ある人を救助が遅い為、眼の前で数人が亡くなりました。非常につらい思いをしました。後で聞いた話ですが18日の夜迄、命があった人の話を聞かされ又、悲しい思いをしました。

自治連合会の集りがすぐさまあり、救援物資の援助をいただく為には、指定された、避

難所でなければ物資が定期的に配達されない事を知り、東灘本部及び神戸市に足を運び、準避難所に指定を受け、第一歩を進み始めましたが、なにせ人手が少ない為、最初の内は、物資が山積みになり、処理に昼・夜関係なく走り廻りました。運搬に必要な車の「ガソリン」が無く、近くのガソリンスタンドは、閉まっている為、尼崎市の方迄、単車で燃料を確保しに行きました。配送先の自治会の現状の人員を確認する為、一軒・一軒の家を訪ねて、その資料を持ち寄り、会議を開き配送は消防団の協力を得て各自治会の設置場所迄配送され、各自治会の担当者が後の処理をなされ、順調に配布されだしました。私は民生の仕事もありますので、一人ぐらし老人、母子家庭、障害者の現状を知る為に、情報を集めに廻りましたが、私の自治会の中には18人いた人達が、亡くなった人達、避難所に入っている人達、雨が洩れても家の中にじっとしていた人達、現状を見て「力」のない弱者を助けようとする人達の少なさに、驚きを感じました。水汲みが出来ない人達の為に飲料水、便所の水、確保するのに努力をしましたが、用事が非常に多い為、満足な事が出来ず、心苦しく思う日が続きました。青木文化センターが、自治会組織の本部が置かれてますが、医療機関の薬不足、電話が継がらない為、分担を決めて電話局に話をするのに走り、神戸市にも走り、東灘本部にも走り、最大の努力をしましたが、当局の対応の無さに腹立たしさを感じました。私は建築をしている手前、亡くなられた人達の「カン桶」作りに灘高体育館に走り40体分の材料を取りに行き、夜遅く迄組立てました。組立てながら、涙が出て、涙が出て、悲しい思いもしました。共同生活、共同作業、を必要とする時に、人間の「欲望・エゴイズム」、自分さえ良かったら他人の事は知らない、関係ないと、表に出している人達を数多く見て来ました。悲しい事です。又、その反面に、あの人がと思う人達が素晴

らしい活動を起こし、協力を行い、嬉しい思いも多くありました。今回一番嬉しい出来事は、あの暗い時期にも、新しい生命の誕生に出会い、弱者同志に依る、ボランティアの協力も得て浴場に行きましょうと云う申出に深い愛情を感じ涙が止まらなかった事を思い起こします。もう二度と災害には遭いたくないと思います。今後の自治会組織におきましても、災害時の「コミュニケーション」の必要性を知り、努力を積み重ねて、道で出会う人にも笑顔で挨拶・会話が出来るように自治会のあり方を考えていきたいと思っています。

阪神淡路大震災当日の出来事

北青木第3住宅自治会

会長 藤田 健資

●自治会組織の対応

直ちに役員を集合させ連携をとり、住民の安否確認の指揮と全世帯の安全確認の実施。だが一件異状ありとの連絡を受け現場に駆けつけると室内の奥で大きな声で助けを求め、女性と子供の泣声と叫び声が聞こえるだけで玄関の戸が開閉せず隣家へ入り、バルコニーの間じ切り板を破壊し窓ガラスを割って侵入、女性と幼児の寝ている布団のうえに大きな箆筒が折重なって倒れて圧迫状態に付き、近隣の人達の助けを受け無事親子を救出する。私は親子の怪我が一番さきに心配になり、ご主人のことを尋ねると神戸市の消防職員なので昨晩は夜間勤務に付き不在。その後、親子の怪我に付いての病院での診断の結果、女性は腰部と下肢が負傷しており3ヵ月の重症。子供の怪我に付いては1週間程度の軽症と診断。震災当日住宅近隣のアパート及び文化住宅などが全壊し数人の方々が家の下敷になっていると連絡を受け現場に駆けつけ大勢の人たちと一緒に救出にあたり、大声で呼掛ると男性大人の声が聞こえ、救出に成功するが、姉妹16歳と12歳は圧死。姉は布団の中で汗を一杯かいて死亡。妹は柱の梁が左側頭部顛顛に直撃し穴が空いており既に死亡、その後姉妹の遺体を当住宅集会所に2日間安置。私は姉妹の死を悼み無念と悲しみで涙する。震災後2日過ぎても当住宅のご主人が会社から帰宅されず家族が安否を気遣っておりましたが捜索の結果御影鳴尾線の魚崎北町幹線上に住宅が倒壊し偶然にも下敷きになり圧死。東灘警察署により身元確認。

●震災以降自治会住民の救援活動に付いて

私は昭和60年運営委員長、昭和61年度自治

阪神淡路大震災記

前田町自治会

会長 磯 辺 豊

平成7年1月17日午前5時46分

未曾有の大地震発生、一瞬何が起きたか判らない。どんとはね上げられパッとテレビが切れ足許に落下ぐらぐらと来た。地震だと隣の妻に布団を覆れと指示。隣室で物の倒れる音壊れる音。長く感じたが、10秒そこそこの出来事。外は未だ薄暗い。2階の息子が向いのマンションが全壊だとの声。6時10分過ぎやつと表へ出る。青木駅南より黒煙が上がり炎が見える、消防に連絡も出来ない。水も出ない、処置なし。向いの甲陽マンション2階建48戸全滅、若い人4～5人と小生息子とで調査、棍棒で応答ある所を掘り起す。北側3名救出、南側は鉄骨あり、救出を住民の人に依頼し、福池小学校に向ふ。既に上田教頭外3名の職員来校。避難者は約3～400人位か。教頭が市や区に電話するも不通。避難者続々増加。当分帰宅出来そうにないので服装を整へに帰宅。偶然向いのスーパーマルハチの中西常務とバッタリ。パンと牛乳の提供を受ける。地獄に佛だ。台車にて運搬するも道路不良の為200m程の道が何と長いこと。3回往復パン400ヶ牛乳1ℓパック200本。アット云ふ間に無くなる。

安本校長徒歩で到着。途中JR六甲道住吉間高架倒壊との由、避難者1000人位となる。

午後に自治会より馬場副会長、高会計、来校する。職員室を本部とする為室内整理。阪神高速深江地区倒壊の報告。夕方パン、リングゴ少々入荷するも配分に苦勞4ツ切りにて配布するも当たらない人よりの苦情。乳児のミルクの要求あり。何とか水とコンロを家より持参する。ガスが不足だが、少量間に会ふがどうすることも出来ない。夜が来る。寒さと恐

会副会長、昭和62年度に自治会会長職を務める。そして震災当日になって住民より依頼を受け、平成6年度の自治会会長が遠隔地に避難につき会長不在になり、平成7年1月17日から会長職を受ける。住宅住人の被害状況の確認。住民が騒然としており冷静に対応。その後先ず頭に浮かんだのが食糧の供給でした。予より私共の自治会に付いては青木文化センター内、青木自治連合会として貝谷央会長様に御指導を受けており、救援物資を供給して頂きました。私は住民の方々に水道が復旧されるまで食糧物資を2ヵ月間供給。3月18日から住民に自立させる。

ガス供給日は4月20日頃でした。地震から10日過ぎに仮設の電線で電気が流れた夜が一番嬉しくて震災の悲しみも忘れて拍手喝采家族全員する。地震当日私と妻は6帖の間に2人で寝ており朝の何時頃とも確認できず、大音響と同じに空中に浮いた時に立ち揺れが激しくなり右頭と両腕肘に当たり、とっさに筆筒を受け止める。もし私がタンスを受け止めていなかったら、妻の寝ている顔面に落下直撃されたと思う。

私も震災以降住民の救援と復旧活動に多忙につき右上腕肘内転時に痛み自然に完治するまで約3ヵ月以上経過する。此震災に付いて住民も大変でしたが、私が一番感謝致しているのは、自衛隊員の皆様と篤志者、ボランティア活動の皆様と共に神戸市職員の方々同じに地域住民の対応に大変御苦勞をされた区役所職員の皆様に衷心より感謝申し上げます。

阪神淡路大震災と言う未曾有の体験から簡単な私の手記です。

怖。校庭ではグループ毎に焚火をしている。交替で不寝番。校外で焚火をしているとのこと、早速校内は先生に依頼。三名にて町内巡回小学校へ行く様に勧告するも家財の盗難の見張りとのこと。数ヶ所見廻り火災のない様依頼し帰宅。序に帰宅し懐中電灯2ヶ持参する。寒さも空腹も余り感じない。朝から殆んど食べてない。校内に夜中も避難者の消息を聞きに来られるが、名簿は殆んど出来てない。校庭に「なにわ」ナンバーのライトバン2台外部からも来ている。他所より死体安置依頼あり2教室に使用されるので当方も他へ移す様依頼しているので断る。後に無量寺へ移す。18日早朝御影浜のガスタンクが危険とのこと、魚崎より大勢移動して来た。2000人を越している。隣接の交通公園開放依頼し何とか収容する。朝少量のパン菓物4つ切配布するも到底間に合はない。水が来るがこれも思ふにまかせない状態。トイレがどうにもならない。若い人でプールの水を運んで清掃する。先生方は大分出て来られ校内整理は先生方に依頼。運動場と、北青木集会所。青い鳥幼稚園は自治会役員で世話をする。正垣さん家屋倒壊の爲18日夜より、小生息子も合流する。午前南側市営住宅より出火。プールの水で消火。19日午前2時待望の毛布1,200枚到着。男子10名程で降車、積上げ保管に悩む、夜明け迄見張り、それでも盗難に会ふ。校長教頭配布に頭が痛い。本日より教室毎に責任者を作り食糧物資の配布を行ふことにする。夜やつと電気が来た。マイクが使用出来たので皆大喜び、これで多少秩序が保たれるだろう。

自治会役員は22日に家に帰った。その間夜警、運動場の物資の監視、自動車の整理等々5名の皆さんご苦労さんでした。小生はその後北青木集会所が5月10日に閉鎖迄、北青木会館いこいの家は北青木自治会長前田一雄さん入院後の2月5日より会館監理者岡田さんと、8月10日の避難所閉鎖迄交替で連絡係として居りました。その間いろいろと現在の人

間像を改めて見て、この年令になって大変勉強になりました。幸にも小生宅は半壊で何とか修理も出来ました。今後共働ける間は自治会活動に頑張りたいと思っております。二度と出来ない尊い経験でした。(終)

阪神大震災3日間のドキュメント ～六甲アイランドCITYの場合～

六甲アイランドCITY自治会

会長 向田登志良

◎ 第1日（1月17日）

なんとも恐ろしい目に遭ったものだ。まるでトランポリンの上で跳ね上がったようで、立ち上がろうにもベッドにしがみついているのがやっとの20秒であった。

わが家は開発の得意な神戸市が造成した海上都市六甲アイランドにある。地震発生後、ガラスの破片や倒れた家具で足の踏み場も無い各部屋をとりあえず整理しているところへ、N社から第一報が入る。六甲ライナー（島と本土とを結ぶ無人電車）の橋桁が落下しているという。その間、携帯ラジオからは震災の被害を時々刻々と報道していたが、断片的で全体像がよく分からない。しかし、被害が大きいことは想像できた。自治会の責任者としてどうするか考えながら管理会社事務所に駆けつけたのが8時すぎであったらうか。道すがら心配していた液状化現象が見当たらないのでほっとする。見えない所で水抜き工法に金を使ったデベロッパーの良心がここに生きている。集まった3人で情報を分析したところ、この島は孤立するおそれが多分にあると判断し善後策を協議する。速やかに災害対策本部を設置して対処することにし、

① 管理組合理事長（11の管理組合がある）、自治会役員を招集し、協力を要請する。

② 当面の問題となろう食料・飲料水を確保する。

などの手配を決める。

①については電話が不通の街区もあり、連絡に時間がかかることが予想されたので当日の1時集合とした。

②については生協・スーパーに対し、パニックを避けるため開店しないこと、食料品など

の在庫を住民に放出するよう要請（スーパーは独自行動）。また、住宅地周辺の食料品メーカーや物流センターにもストックの放出依頼（大方は快く応じてくれた）。この島の住宅・ビルのデベロッパーにも救援を依頼する、など取決め早速実行にかかる。

そのうちに本部とした管理事務所の電話が不通となり別の事務所へ移動する。

食料・水について市役所へ電話「区役所に聴いてください」。区役所へ電話「立ち上がったばかりで手がまわらない」。こちらは生死の問題で手一杯と言わんばかり。

1時に集まった理事長・役員に災害対策本部を設置すること、デマが飛び交う恐れがあるので情報の一元化に協力してほしいこと。食料品・飲料水は本部が出来る限り確保し公平に分配するよう努力するので各管理組合毎にこの作業のための住民ボランティア組織を作って欲しいこと、などを依頼する。

一方、若手別働隊は生協・周辺メーカー・物流センターの放出物資の仕分け、配給の準備をするが、公平を期するため時間がかかる。終わったのは冬の夕闇が迫っていた。

夕方一部に電気が回復。歓声上がる。若い母親が駆け込んできて乳児のミルクとお湯が欲しいと言う。そこまで気が回らなかったがミルクと電気ポットの手配と通電した場所を教える。余震が大小頻繁にあるので高層に住む人達が怯えて小・中学校に避難し、数百人いるという。ここにも乏しいが食料や水を配給する。長かった1日が漸く終わった。あとは若い人に任して一足先に失礼する。9時帰宅。食事を済ませていつでも飛び出せるよう着替えずそのまま寝る。余震があったらしいが知らずに朝まで熟睡。

◎ 第2日（1月18日）

早朝電話。対岸のLPGタンクからガス漏れで爆発の危険性があり、県警から避難勧告が出たという。事実を確かめて各管理組合に連絡し、島の南部に避難するよう周知方を依

頼し交番にもパトカーのマイクで広報してもらおう。南部にあるカネディアン・アカデミーとノルウェイ学校に避難者の受入れを要請。10時には1万人が移動して学校・交番・その他の施設が人で満杯、車の中で待機する人もいる。昼間おにぎり1万2千個ペットボトル4千本を積んだデベロッパの救援隊のトラック到着。おにぎり一人1個、水は1世帯1本配給。有名人も企業の偉い人も整然と並んで受け取っていた。しかし、配給に3時間近くかかる。その間カネディアンの校長と1時間おきに爆発の危険性の経過を報告するよう求められるし、避難所の様子を覗いたり、クレームの処理とくにトイレには困った。水が出ないので空き地に穴を掘り囲いをして応急処置をした。30分毎に区役所と消防署に電話をして経過を求めたが「目下ガス抜き進行中、解除予定は不明」の返事ばかり時間はどんどん経過する。夕方5時の回答が「良い方向に向かっているが解除はまだ出せない」の返事があり、夕闇も迫り高齢者・幼児の風邪が心配だし、独断で避難解除を住民に指令。すぐ警察からなぜ解除指令を出したのかと詰め寄られたが病人が出たら誰が責任を取るのかと反論したら「しゃあないな」と理解してくれた。

これより前、2時過ぎ、スーパーが開店するとの噂が流れて一部の人がそれらへ移動した。しかし、大部分はそのまま。避難勧告が出ているときに開店とは何事かと警察も止めたが強行したらしい。しかし、この避難騒動は丸一日かかったわけで、救援隊が都合よく到着したから人心も落ち着いていたものの、対策本部としてはこの事件で打つべき手段が遅れ、このロスタイムはまことに痛かった。8時、管理組合理事長のほか学校、病院、企業代表者集合。物資・飲料水などの到着予定など打ち合わせ、10時、帰宅。

◎ 第3日（1月19日）

深夜にデベロッパから救援物資の第2便が到着。デベロッパの応援社員と若手ボラ

ンティアが積み下ろし、仕分け作業。おにぎり2万個、水、粉ミルクなど。8時、各管理組合、病院、学校、ホテルがひきとる。10時、神戸市から水1トン車3台、三重県から6トン車1台到着。各車とも早く下ろして次に回りたいという。本部で配給先を指示したら「なんでそんな組織がきちんと出来ているのか」と驚く。おにぎりを3個あげたら「地震後はじめて米の飯を食った」という。この時以降、生ゴミ収集コンテナを洗いビニールシートを敷いて水を受け取るシステムを確立（時間の節約）。午後区役所からはじめて食料品が届いた。この頃から遠くは東北、関東、中国、四国の自治体・企業から救援物資や水が届きはじめる。

今日から毎日13時、19時に定例会議を実施することにする。（理事長、学校、施設の代表者）。外資系企業から島外脱出用の船をだすという。人数に制限があるため緊急患者優先に108人に絞る（出航は明朝）。後で病院からこの船で大阪市大病院に送った透析患者は間一髪セーフだったとの報告があった。

島の約半分は通電したのでテレビ（アンテナつきのみ）・ラジオは視聴できたが、新聞は道路が寸断されているので到着が大幅に遅れ、夕刊が翌朝に朝刊が夕刻になって来る。勿論、宅配は余震が心配で宅配出来ず要所々々に積んであるだけである。報道によれば被害が日を追って多くなっている。われわれにもマスコミ関係者が取材に来るが、住宅地は倒壊もなく元のままなので迫力がないのか、とおおりいっぺんの取材で帰っていく。ただ、港湾施設や岸壁の被害には関心を示している。それにしても住宅の半分は停電したままで不満が高まりつつある。19時、定例会議。救援物資の到着が今日も深夜になるという。参加者の顔も髭面になり、どす黒く、寝不足で目が血走っている。服装も汚れている。このような事態から早く脱出したいが長期戦になりそう。会議の終わりに一部の人に負担がかか

らぬよう交代できる組織化を再度依頼。自衛隊が遺体安置所の場所を尋ねてきた。この時はじめて安置所があることを知る（島の南東側にある航空貨物集積所K-ACTだった）。住民には敢えて知らせずにおくことにしたが、遺体確認のために来られた遺族の食料や飲み物、毛布などを届ける。電気が通じている住宅街から食料はもう不要という声もでてきたので、今後重点配給に切り換えることにする。本部もどうやら生存のための対策から生活のための対策（ライフラインの回復要求）に移行する時期になったようだ。とにかく電気と水だ。トイレで流す水を汲むために住宅地の真ん中にある人工川に群がる人達をなくすようにしなければならない。

今日の朝ぐらいから物資や水の配給が量はともかくスムーズに住民にわたっている。これはいち早く配給システムを作ったことと、それにもまして住民各自が自らのことは自らの手でという自覚で進んで活動に参加したからだろう。また、自分たちの家がああ激震に耐えて比較的健全だったことが心の大きな支えになったであろう。

今回の震災がこの新しい街に残した唯一の資産は、住民どうしが一体となったこと、すなわち連帯感ではなかったろうか。

〔おわり〕

御影中仮設住宅自治会

会長 山田 啓 造

当時64歳になったばかりの私は 子供達も独立しており 夫婦二人が小春日和の縁側で日向ぼっこをしている様な晩年を楽しんでいましたが よもやと思われる震災で 家内と多くの私財を失いました。幸い娘家族が近くまた全然被害もなかった為 私は取りあえず娘家族と同居を致しました。当面は友人達の援助で 傾いた家屋から家財を取り出す作業とその整理に忙殺されましたが 幸いにも御影中仮設住宅を与えられたので 亡くなった家内の遺志として ここで私のささやかなヴォランティア活動を始めました。

3ヶ月ばかり経過して 隣近所との会話が始まると共に 自治会を作ろうとの自発的な話し合いがなされ ヴォランティア活動の故にか 私に自治会設立の依頼があり 私もそれを受けて会社時代の経験を生かして組織作りをしました。即ち各棟ごとに世話人と書記・会計を決め 私は世話人代表となり 住民との接触は専ら各棟の世話人がする事とし 私は世話人の束ねと 団地内の安全と 住み心地よい環境作り及び行政・警察・ヴォランティアグループ等 外部との交渉を一手に引き受ける事としました。

一番心配し気を遣ったのは 火事である。一度火を出せば必ず死人がでるからと 住民の防火意識を喚起し 足りない消火器は自費で工面して年寄り家庭の自室内に設置したり各戸の戸口にバケツ一杯の水を置く事を義務づけたりした。ついで、この団地から孤独死を出さない事を 世話人達の合言葉とし 毎日近隣との会話と「ふれあい」を心掛けた。さらには なんとか団地住民の交流の場が欲しいと思い 市役所や被災者支援会議などに

出向き 希望を述べたが当時「ふれあいセンター」は100所帯以上の仮設団地しか認められず 為に工事現場などにあるボックスハウスでもと 友人達に支援を求めたりした。週一回開いた世話人会議を自室でしたり 近所のクリスチャンセンターを借りたり 常に問題意識を持って住民のより快適な環境づくりに努力しました。

幸いにも昨年末に「ふれあいセンター」がこの団地にも出来 あらたに運営委員会も組織し センターでの行事のプランニングに日々忙しくしている。多くのヴォランティアグループから 炊き出しや手伝いを申し出て頂くが 出来る限り住民の「ふれあい」と活性化がこのセンター設立の目的と理解して 住民による住民の為の行事を積極的に計画し 料理教室（足の弱い方への配膳を含め）タコ焼き大会 ふれあい喫茶室 手芸の会など 毎月の定例の行事を含め 散髪の日 中古衣類のバザー バーベキューや模擬店やかやく御飯・おでんの無料サービス バス旅行で梅見や桜花など 住民とヴォランティアグループとの共同作業で 今日までセンターは楽しく運営されている。

ここの住民は積極的に参加してくれる人が多く この数カ月で団地自治会とセンターの運営も共に順調に回転しはじめていえると言えよう。誠にありがたい事である。

御影中仮設住宅は 市内でも絶好の場所にあり阪急・阪神御影駅・JR住吉駅 あるいは阪神バス・市バスなど交通至便 区役所・銀行・郵便局・市場・マーケットなど 徒歩10-15分圏内にあり 多くの住民は もうここから動きたくないと言う。

今日までわずか一年で 既に数戸の入れ替えがあり さらに物理的にみても この仮設住居は長持ちしないので 公営住宅へ入居出来ればよし または別の仮設団地へ移されるかもしれない境遇にある。60才以上80才代までが2/3 以上いるこの団地住民が 終の住処

を得れるまで私のヴォランティア活動を続ける決意です。そして たとえ短い期間の仮設団地での「ふれあい」であったけどこの団地を離れる時 皆さんが「それなりに楽しかったナー」といつまでも思い出に残る環境を作りたいと希っています。

以上

震災を乗り越えて

六甲アイランド第3仮設住宅

ふれあい
センター委員 小林 きよ

六甲アイランド仮設住宅第三ふれあいセンターでは、集ってきた住人が写経をしている。まるで人は、一人もいないかのように静かで物音ひとつしない。ほのかに墨の香がするだけ。

書き終わったので筆を置いて、頭をあげた。写経をしている人々の真剣な顔。どの顔もどの顔も神々しいばかり。頭の中にも顔の中にも、震災の悔しさも家を失った悲しみも全くない。ひたすらに写経をしている。

よかった。よかった。やっと一人の人としての歩みをそれぞれに始めたようである。

このみんなの顔を見ると、私は幸せにすっぽりと包み込まれてしまう。

思えばあの日、1月17日、もう一度、こんな静けさが戻ってくるなんて考えもしなかった。

何が起きたのやら、わからぬまま、一瞬にして瓦礫の山と化した神戸の街の中に、死人のように立ちすくんでいた私。そして神戸の全市民。私は、早朝登山に出発したばかりだった。

ふと気が付くと、身も知らぬ他人の娘さんを我が子のように抱きしめて、自分のジャンパーの中に入れていた。若い娘は、寒さに震えている。パジャマに裸足。

「お布団でも毛布でも被ってくればよかったのに？」

「お布団も毛布も筆筒の下敷きになってとれなかったんです。」

とかほそい声で言った。

真暗でなかなか朝にならない。

「太陽よ早く出ておくれ、

お願い！」

お願い！」

何度心の中で祈っても、やっぱり真暗なまま。それどころか何度も何度も余震が起きる。

御影中学校の運動場には頭から毛布や布団をすっぽりと被った円錐形の物体がいくつもいくつも出来た。

寒さに耐えかねた人々はとうとう焚火を始めた。ぞろりぞろりとその回りに集っていく。みんな無口。何も喋らない。

西の方が急に明るくなった。火の手があがったのだ。大変なことになる。でも消防車の音はいくら耳を澄ましても聞こえない。

「火よ早く消えて。御影を焼かないで！」

祈るしか他に術がない。

ようやく東の空が明るくなりはじめた。

胸に抱いた娘とも、さようならして、瓦礫の中を我が家の前に戻ってきた。家は何とか建ってはいたものの、家具、建具、壁、食器が、まるでミキサーで混ぜたようになって部屋の中に山をつくっていた。土足でなければ危くて中へ入れない。

壁土の山の横から黒いビニル紐が見えた。電話線だ。もしかして、電話器に繋がっているかもしれない。ビニルのコードを用心深く手操っていった。電話器が壁土の中から顔を出した。ダイヤルは、土砂でガリガリと音をたてながらも無事回ってくれた。

「もしもし、お母さん、神戸、地震、私、元気、家、壊れた、神戸壊れた。」

東京にいる娘に早口に伝えた。むこうは何も言わない。やっとこれだけを伝えると電話は切れた。

ごった返しのまま、17日は夜になった。水一滴口にしていない。排尿・便の匂いが街中にたち込めた。どうする術もない、文化というものの脆さ、哀れさ。

月と星は、きのうと変りなく避難所の体育館の天窓を通り過ぎる。

あ～あ。

放浪生活3か月。私にも仮設住宅が当たった。飛びあがる気持ちで鍵を受取りにいった。

区役所で渡してもらえるものと思っていたのにハーバーランドだと言う。道は不案内でなかなかわからなかった。鍵ひとつ渡してもらうのに、こんなに苦労しなくちゃならないのかと思うと、飛びあがる嬉しさは、だんだん、萎んでいった。おまけに寒の戻りの雨も降り出し、六甲アイランドにはライナーはなく、橋は渋滞して、代替バスは住吉から一時間半もかかった。その上バスに乗るまでに列をつくって300mも待たなければならない。顔見知り的人是たったの一人も居ない。仮設住宅は、まるで島流しのような感じだった。自動車も走らない、人も通らない、半分は空家だ。

そして、一年。

今、住民は、目を輝やかせて、写経するようになった。出会う人は、笑顔で必ず挨拶を交す。「ここにいつまでもいたいね。」「駅に近いし、空気はいいしー。」「みんないい人だし。」どの窓からも美しいシクラメンが見え、南側にはチューリップも色づいてきた。

ふれあいセンターもここまでの道は、決してスラスラと、というわけではなかった。これからも意見が対立することもあるだろう。しかしながら、お互いに前進する為の争いと見守っていききたい。

ゆとりをもって。

阪神・淡路大震災を乗り越えて

神戸商船大学白鷗寮自治会

会長 有田俊晃

平成7年1月16日、地震前夜の僕は、友人と三宮のある居酒屋にいた。僕たちは今の平和な何事もなく過ぎていく日々を、また、間近に迫る就職や今後の白鷗寮について、時間の経つのも忘れて語っていた。その後、意気揚々と僕と友人は互いに自室に戻り、深い眠りについた。その時、既に時計の針は午前3時をまわっていた。

5時46分、大きな地鳴りを夢見心地で聞いていた直後の大地震に、僕は身動き一つできず只々そのすさまじさに茫然としていた。揺れを感じてからどれほど経ったかわからない。いつまで続くんだろうかと思ったその時、ラジカセが頭に落ちてきた。「もう、おわりだ!!」と思ったが、揺れはおさまった。そして、既に起きて廊下で話をしている学生の声に気がつき、僕も廊下へ出てみた。

足もとはふらついてはいたが、意識ははっきりとしていた僕は、寮内の状況を見るため外に出た。しかし、外はまだ真っ暗で何も見えず、また、寮内のどの場所にも電気がついていなかった。微かな明かりで寮棟の倒壊がないことを確認し、ほっとしてその周辺を見ると、闇の中に赤々と燃え上がる炎が見えた。あらためて非常事態に気づき、徐々に集まってきた寮自治会役員に「寮生総員中庭集合」の点呼の指示を出した。幸いその時寮内にいた寮生には被害がなく、全員無事だった。しかし、寮外にアルバイトに出ている寮生の安否が分からず、心配だった。

寮生の安全を確認した後、余震のためその場で待機していたが、停電のために情報源であるテレビやラジオが使用できなかったため、状況が全く分からなかった。そこで、車のラ

ジオを聞くことにして、車を持っている寮生に頼んで車を中庭に入れてもらった。その時の情報では、震源地は淡路沖、震度は6としか分からず、何の役にも立たなかった。

少し明るくなり、互いの顔がはっきりと分かるようになってきたころ、「一時解散、居室待機」として、周辺の状態を見るために寮外に出た。しかし、一歩踏み出したところで僕の足は止まった。すぐ側の三和市場が倒壊していたのである。その悲惨な状況には、僕は言葉もなく、ただ見ていることしかできなかった。すると市場の方から「人がまだ倒壊家屋に埋まっている。」という声が聞こえてきた。既に見に来ていた数人の寝間着姿の寮生が救助に行こうとしていたのを見た僕は、その寮生を引き止め、作業服を着用し、安全靴を履き、トーチランプを持ち、防寒対策をしてから救助に行くように指示をした。その後、自分も着替え、救助に向かった。三和市場の建物は倒壊して道にはみ出していた。また、中央のアーケードは下に落ちており、正面から入り込むことは不可能だった。しかも、辺りはガス臭く、“もし誰かがたばこに火をつけたら”と思うと怖くて仕方がなかった。既に中に入り込んで救助活動を開始していた寮生とともに作業を行ったが、何の道具もない状態で作業を行っていたので想像以上に作業は難航した。そこで、僕は2階建ての家の屋根に上り、倒壊していない家から何か道具を借りてくるよう頼んだ。借りた物の中には、ノコギリ、ハンマー、ボールなどがあった。屋根に上った際に辺りを見まわしてみると、三和市場だけでなく、周辺一帯の木造家屋は大半が倒壊しており、地震の大きさ、被害の大きさをまざまざと見せつけられた。

数時間救助活動を行った僕は、一旦寮に戻り、避難者に寮内に入ってもらうための準備を行うとともに、全てに対応するための本部を学生当直室に設置した。その後、三和市場と寮とを何回か往復していると、ある寮外通

学生の救助にあっていた寮生から、同期の友人の死を告げられた。まさかそんなことはないと心の中で思いながら、僕は本部にて、寮生への指示、電話の取り次ぎ、大学との連絡、避難者の対応を行っている、その友人は毛布にくるまれて寮へやってきた。言葉は出ず、ただ涙が出てきた。彼を倒壊家屋から引き出した寮生に詳しい状況を聞いたとき、いたたまれない気持ちでいっぱいになった。その後も次々と悲報が入り、僕の頭はどうにかなってしまいそうになった。

救助活動は、範囲半径約二キロメートル、夕方まで続けられたが、寮生の安全を考え、日没と同時に帰寮するように指示を出した。そして、その救助活動に際し、報告のあっただけでも100名以上の尊い命を救助することに成功したことがわかった。

日没後、本部である学生当直室は20名ほどの寮生で埋めつくされていた。みんな余震の恐怖で眠れないのである。余震がくるたびに寮務委員は巡検し、報告に来た。ラジオは1時間おきに、地震によって奪われた尊い命がどんどん増えていくのを告げる。みんなは「こんなでまいったらあかん！何かおもしろい話でもしよや。」と励まし合った。夜がこんなに長いものだとは思わなかった。

2日目、交通機関はいまだマヒしたままだったが、寮生には避難帰省をしてもらった。食料がなかったのである。寮生は、保存食や水を避難してきた人たちにあげてくれと我々に手渡してくれて帰っていった。残った寮生は40名程度、避難者は400名以上いた。我々はすぐに避難所としての態勢を整え、今後に備えた。

3日目、意志統一をし、運命共同体として頑張ることだけが自分を支えてくれる唯一の要素だった。その中で普段から寮生活を通して培ってきたものを応用し、学生側には物資を管理・配給する班、消毒液・うがい液を担当する班、仮設トイレを管理する班などを組

織し、また、住民側には各ブロックごとの代表者を選んでもらい、住民・学生共同の自治組織を作り、代表者会議を開始した。

一方で、未だ行方不明だった友人が倒壊したアパートの自室で亡くなっていたのを、自衛隊とともに作業を行っていた寮生が引き出した。みんなの感覚がマヒした状態の中で、救助作業にあっていた寮生は、ああ、遭えてよかったと思ったそうだ。

その後、大学が再開するまでの間、ボランティア活動を行ったが、本当にいろいろなことがあった。当初、物資が届かないときには、住民のみなさんと一丸になって、リヤカーを引っ張って余震の続く中、区役所へ走った。今までの常識を完全にくつがえすことばかりであった。

今回、何故このように寮生が一つとなり、自ら危険をかえりみず、救助・救援活動をすることができたのかはわからない。しかし、この学生生活を振り返ると、船乗りのチームワークや船上生活は、24時間緊急事態であるといったようなシーマンシップの教育、更には、日頃から近隣の人々との交流があったことが今回のことに起因しているんだと僕は思う。

震災から約14か月経った今、当初は白鷗寮に約460人、本部キャンパスの体育館、武道館にいた約600人の避難者も、8月27日までには全員退去され、被災・損壊して不自由であった白鷗寮や本部キャンパスの全面復旧工事もほぼ完了し、ようやく正常な寮生活や学園生活ができるようになったが、まだ、グラウンドや繋船池の護岸の復旧工事・海技実習センターの建設工事は、これから1年程かかると聞いている。

しかし、街は徐々に賑わいを取り戻し、復興の兆しが見えてきたが、この大震災を過去のことにするわけにはいかない。その傷跡は僕の心の中に深く、大きく根強く残っている。見慣れた景色が失われた。友人の死があった。

さまざまな記憶が、いまだに鮮明に脳裏に浮かぶ。そして、この大震災を乗り越え、更なる前進をしていきたい。

●白鷗寮自治会の救助活動に対する表彰及び記念事項

- ・平成7年3月2日 日立グループ「親切会」表彰
- ・ “ 5月27日 自治大臣表彰
- ・ “ 7月24日 神戸商船大学長表彰
- ・ “ 9月1日 防災功労者内閣総理大臣表彰
- ・ “ 9月1日 文部大臣から「記念品」贈呈
- ・ “ 9月14日 寮庭に記念植樹、記念碑設置
- ・ “ 11月1日 社会貢献者表彰（(財)日本顕彰会)
- ・平成8年1月29日 シチズン・オブ・ザ・イヤー表彰（シチズン時計(株)）
- ・ “ 4月10日 内閣総理大臣から、自治会長に「桜を見る会」へ招待
- ・ “ 10月30日 天皇・皇后陛下から、自治会長に「園遊会」へ招待